

驚いて顔をあげる。

「大切なものじゃ、無いんですか？」

「まあな。けどきっと、そろそろオレの元を離れる時期だったんだろう…」

先生は笑ってそう言う、「よし決まりだ。あれはお前のチョビくんの、新しいオモチャだ」そう言って、ポンッと両膝を打った。

「…どうしてですか？」

思わずぼくはそう問い返した。

胸の内に立ち込める、黒雲のような感情。ずっと以前にも味わったこの感情。

— 本当は、そぼ職人になりたかったんだ。

目を合わせないまま、そうつぶやいた父さん。

遠くの空に諦めと懐かしさを感じながら、それでも自分を奮い立たせるような、そんな切ない目をしていて。

「心配しなくとも、あのコインはそんなに高価なものじゃないぞ？」

三沢先生はそう言って、ハッハッハッとわざとらしく笑って見せた。

「…もう、いらなくなってしまったんですか？」

ぼくは静かにそう尋ねた。

先生は一瞬顔をこわばらせ「いないというか…」そのまま言葉を詰まらせる。

ぼくは少し考えて「もう持っていても、仕方が無いという事でしょうか」と続けた。

先生の目が一瞬、火のように強く光る。

その瞳に恐れを感じ、目を伏せた。次第に、後悔する気持ちが広がっていく。

「そろそろ行きます」

沈黙に耐えかねて、そう切り出そうとした瞬間、「…鋭いヤツだなあ。お前は」三沢先生が、ため息まじりにそう言った。

*

あのコインは、先生の思い出の品なんだそうだ。

10代の頃にスペインに渡り、そこで沢山の美術品に触れ、画家を志した。日本に戻ると美大に入り、教員免許を取得し教師になった。

まずは国内の画壇で力をつけて、またスペインへ渡ろう。

「そんな夢を抱きながら画展に作品を出し続け、気づけばもう30になっちまった」

三沢先生は、ちょっと寂しそうに笑った。

「スペインで、世話になった人が居てな。部屋貸しを商売にするドケチな婆さんだったが、どう言うわけか、ずいぶん可愛がってくれてなあ。

『あんたには才能があるから』そう言って、他の連中には内緒で、こっそり飯なんか食わせてくれた。

別段目利きだったワケじゃないんだぜ？ でもな。オレはその婆さんの言葉に、ずいぶん励まされた。

帰国するときスペインの古いコインを出してきてな。

これ見て思い出せって。スペインで一旗あげるんだって、見る度に思い出して、いつか必ず帰ってこい。

そう言って、目に涙をためて見送ってくれたんだ」

スペイン時代の話をするとき、先生の目は美しく輝いた。

「色彩ってのはな。風土で決まる。もっと言や、その土地その国の光で決まる。

オレはスペインに渡って初めてそれを知ったんだ。
足元の赤土。海の青。若葉の緑。女の肌。市場に並ぶ果実の色。

湿気の多い日本とは光の質も、量も違う。だからこそ、そこに生まれる色が違う。

理屈じゃなく、言葉じゃなく、光は色なんだって、
ぜんしんぜんれい
全身全霊でそう感じた」

話ながら先生は、キャンバスに描いた裸婦像を、ぼんやり眺めている。まるで色彩の向こうの記憶を、ゆっくりと手繰り寄せるように。

ふいに、脚に違和感を覚えたんだろう。自分の義足に目を落とした。

「…オレは子ども時代、ちょっと苦労したからな。

この脚を見れば分かるだろう？ ガキの頃は、こいつがそりゃあ苦になった。なんで生まれてきたんだろうか。そんな風に、幾度嘆いたかしのれない。

だからな。光は色だと悟った瞬間。オレは涙が止まらなかった。

世界は美しいんだ。途方もなく美しいんだ。

こんな当たり前のことを、何故オレは知らないまま生きてきたんだろう。

そう思ったら、自分の体、この使えない左脚すら、とてつもなく愛おしく感じてな。

心の底から感謝が湧いて、止まらなかった。

そしてその時決めたんだ。

この躍動やくどうを形にしよう。せっかく生まれてきたんなら、この色彩を、この世界の美しさを、自分の手で形にしようってな」

声は少しずつ力を失い、言葉の後には悲し気な余韻よゐんが

残った。

先生はぼくの目を見ない。あの時の父さんと同じ、色あせた記憶の中に身をゆだねて、瞳はどこか遠くを見ている。

ぼくは言った。

「もうスペインには、行かないんですか」

先生は小さく笑い、「もう 30 だからなあ。それにな。画展に毎年出品する。こいつも一種の趣味みたいになつて、それはそれで楽しくなってきた。

お前らに絵を教えるのも、充分にやりがいがある」そう言った。

ぼくらに絵を教えることにやりがいを感じている。

きっとそれは本当なのだろう。なのに何故、こんなに寂しい気持ちがするんだろう。

「…夢って、結局は叶わないものなんじゃないか」

ぼくはうつむいたまま、そう言った。先生がハッとして向き直る。

「いや…しまったな。まずい話をししまった。

なあ、岡田。オレとお前じゃ一回り以上違うんだぜ。

お前はまだ 14 才。これから何だってできる」

先生こそまだ 30 だ。太陽期のど真ん中じゃないか。ぼくは心の中でつぶやいた。

「それにな。オレは充分今の生活にも満足してるんだ。授業も楽しいし、こうして時間を見つけ絵も描ける」

先生の夢が美術教師だったなら、きっとこんなに悲しくなったりしない。

その言葉を呑み込んで、ぼくは立ち上がった。

「…じゃあ、あのコインはチョビにやります」

少し唐突だったろうか。だけどぼくはこれ以上、父さんと同じ目をした先生を見ていられなかった。

そのまま速足で美術室を出る。先生が慌てて立ち上

がったのが分かったけれど、ぼくは振り返らなかった。

走って走って、教室に戻る。扉を開けるとそこにはもう誰の姿も見当たらなかった。

21. 木野さんのネーターチャート

空っぽの教室には、西の窓からうっすらと夕日が差し込んでいた。どのくらい話し込んでいたんだろう。

(木野さんに悪いことしちゃったな…)

肩を落とし、きびすを返そうとしたその時、わっと背中を押す誰かの手。振り返るとそこには木野さんが立っていた。

「待ちくたびれて、帰ろうかと思っちゃった」

「ごめん。良かった、居てくれて」

木野さんは笑って「三沢先生と、何話してたの？」そう尋ねた。

「授業が始まる前に、コインを落としたって言ってたろ。あれ実は、ぼくが拾って持ってるんだ」

「そうなの？」

「それをさ。明日届けるって言いに行ったの。でももういないんだって」

「え、でも探してるみたいだったのに…」

「昔の夢の、思い出なんだって。でももうそれも、諦めたって」

ぼくはつっけんどんにそう言うと、小さくため息をついた。

「…夢があるだけでもすごいのに、どうして簡単に手放せるんだろ」

半分独り言のように言ってみる。

何となく同意してくれることを期待していたのに、

彼女の答えは予想と違っていた。

「わたし、分かるな」

「え…」

顔を上げる。

「…大事な夢だとダメだった時に悲しいじゃん。それくらいなら早めにやめちゃおうって、思うんじゃない」

「・・・」

そう言うもんだろうか。

ぼくはまだ、自分が何をやりたいのかも分からない。

そんな中で、あんな風に目をキラキラさせて語れる何かがあるだけで、羨ましいのに。

そう思いながら、伏し目がちな木野さんの姿が気になった。

「…木野さんも、そうなの？」

「わたしは最初っから叶いっこない夢だって分かってるもん」

「…そっか」

励ましてあげればいいのに、どうにも気持ちが落ち込んで、言葉が出ない。教室はいよいよ西日が強くなって、二人の影を細長く映した。

グラウンドから、クラブの連中の掛け声が聞こえてくる。間延びした声が物悲しく響いて、ぼくはますます寂しい気分になっていった。

「岡田くん、教えてあげれば良かったのに」

ふいに木野さんが言った。

重たい空気を変えようとしてくれたのか、口元に少し笑みを浮かべている。

「何を？」

「え…だから。今日言ってた『夢を叶える方法』。三沢先生にさ」

言われてぼくは、ハッとした。

1

2

3

4

5

6

7

先生に「星の使い方」を教えてあげるなんてこと、
少しも頭になかったから。

「いや…でも先生大人だしさ。たぶん本気で取り合っ
てくれない気がする」

「えーでも、大人だからこそ必要なんじゃない？」
「そうなんだけど…」

「誰だって知りたいよ。使うかどうかは知ってから決
めればいんだし。教えてあげればきっと喜ぶよ」

何だか木野さんに励まされている。そう感じて、ぼ
くは気持ちを奮^{ふる}い立たせた。

「そうだね。なんでオレ、切り出さなかったんだろ」
「明日、話してみたらいいじゃない」

「うん。ありがと」

答えながら、ぼくはあることに気が付いていた。

本当は、誰より木野さんが「夢を叶える方法」に興
味を抱いてるってこと。

三沢先生のことはオマケで「夢を叶える方法」を知
りたいのは、実は彼女自身なんだってこと。

そう思ったらぼくはにわかに元気になって、「『夢を
叶える方法』ってさ。実はほとんどの人が知ってるも
のなんだ」そう切り出した。

「そうなの？」

「うん。雑誌なんかでたまに見かける。でもちゃんと
理解して使ってる人が、すごく少ないんだ」

木野さんの瞳に、小さな光が宿る。

「なんて言うか、みんな占いみたいにしか扱ってない。

でももっと奥深くて、エキサイティングで、実用的
なものなんだ。

木野さんが『自分の夢は叶いっこない』って思っ
てるのも、きっとそいつを上手く使えていないから。

たぶんこれは、ぜんぜん根拠^{こんきよ}のない『心の習慣』で

ヤツなんだと思う」

「…心の習慣？」

「そう。人はみんな習慣を持ってる。

歯は左の奥歯から磨くとか、階段は右足から上がる
とか。無意識にパターン化されてることが、いっぱい
あるんだ。

同じ様に『大切なことは叶わないって思うことで、
後でガッカリするのを防ぐ』っていう心の習慣がある
んだと思う」

木野さんは黙って聞いている。表情はいつになく真
剣だ。

「何が言いたいかって言うとき。

まずは心が勝手に習慣化した思い込みを、ちょっと
脇に置いて。偏見^{へんけん}なしで、ぼくの話聞いて欲しいっ
てことなんだ」

彼女の目をじっと見つめ、そう語りかけた。

ぼくだって、大好きな木野さんが「星の使い方」を
バカにしたり、ちゃちに扱ったりしたらきつとすごく
傷つくだろう。

だからこそ、その良さを丁寧^{ていねい}に伝えたい。その努力を
したい。そう思った。

「分かった。ちゃんと聞く」

木野さんは頷いてそう言った。

ぼくはニコッと微笑むと、彼女に誕生日と生まれた
場所を尋ねた。

「2004年10月12日。生まれた場所は埼玉^{さいたま}。

時間はママに訊かないと分からないけど…。明日で
もいい？」

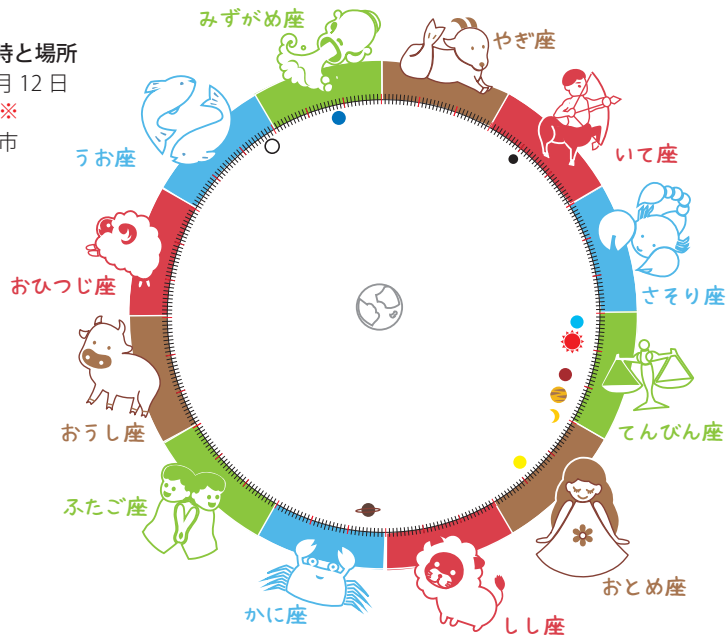
ぼくは頷いて、モックマから借りたタブレットに彼
女の情報を打ち込んだ。

5 チャート

月から火星を 読む -2



木野さんの
生まれた日時と場所
2004 年 10 月 12 日
時刻 不明 ※
埼玉県 秩父市

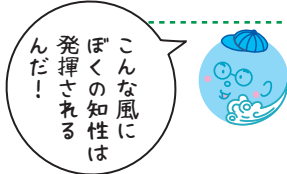
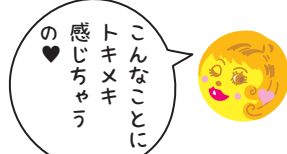
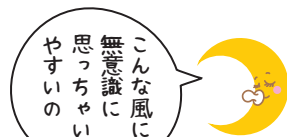


奇数	男 6	×	活動宮 5	×	精神 1
偶数	女 4		不動宮 1		肉体 (五感) 2
			柔軟宮 4		思考 5
					感情 2

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

※ 生まれた時刻が分からない場合は、仮で 12:00 とします。
月は 12 時間で約 6 度移動するため、前後のサインと 6 度以上の開きがあるかをチェックしましょう。開きが 6 度未満であれば出生時刻によっては隣のサインに月が在る可能性も出てきます。自分に照らし合わせながら、両者の月をイメージし読んでみましょう。またこの場合は、ハウスが正しく表示されないため、読みません。





6 おとめ座

6 女 受け身・取り込む♡内側が大事♡

● 柔軟宮 合わせるの大得意！
希望を聴かせてくださいな♪
他人次第って言われちゃうかも

■ 肉体 (五感) 形にする。見える化する。
リアルっ大事！ちゃんとうたしに
利益はあるんでしょうね？

キチッぴしつ
こなせてるか、ああん配…



7 てんびん座

7 男 積極的！発散!! 外側が大事！

▲ 活動宮 スタートさせるの大得意！
迷わずGOGO！
でもちょっぴり飽きしょうかも

🌱 精神 学ぶ、伝える、楽しいな♪
一人に肩入れムリー！何でも
軽やか、重い責任はニ・ガ・テ♪

オシヤレ好き！人付き合いは
とっても軽やか♡

木野さんのネータルチャートを見て、ぼくは思わず
「へえ…」と声をもらした。

ぼくのチャートは月から火星までサインが全てバラ
バラだったのに、彼女ときたら二つのサインに偏って
る。

まだ習っていない木星も入れると、全部で四つもて
んびん座に在るじゃないか。

「こんなケースもあるんだなあ…」

一人つぶやくぼく。

木野さんは待ちきれないと言った様子で、「ねえ、
なににな？ それで何が分かるの？」と肩を寄せ覗き
込んできた。

一瞬、胸が早鐘^{はやがね}を打ったけれど、ときめいている場
合じゃない。ぼくは頭を振ってタブレットを机の上に
置いて見せた。

「これ…なあに？」

「木野さんが生まれた瞬間、10 個の天体が空のどこにあったのか。それを記した図。

ネータルチャートって言うんだ」

「…ネータルチャート。これを見ると、夢を叶える方法が分かるの？」

「いや、見るだけじゃ分からない。

その天体の持つ力、専門性を知り、どんな個性を持っているかを理解すること。

そしてね。知って理解しただけじゃダメ。

日常の中で、自分で工夫しながらその力を使っていく。これが一番大事なこと」

「…力を…使う？」

木野さんは首を傾げた。

ぼくは習ったことを復習するつもりで、一つ一つ、彼女に説明を始めた。

22. 12 サインの復習だ！

「10 の天体は 10 人のスペシャリスト。心強い専門家だ。まずは彼らが主役と思ったらいい。

そしてその 10 人が、一体どんなコスチュームを着ているのか。

いわゆる性格づけを決めるのが、12 のサイン」

木野さんは意外にも、うんうんと熱心に聞いている。

どうやら興味を持ってくれたらしい。ぼくはホッと話を続けた。

「そして 12 サインはね。大きく三つの視点で読み分けることができる」

「三つの視点…？」

「そう。その一つが、男タイプか女タイプか。

木野さんの場合、男タイプのサインに 6、女タイプのサインに 4、天体が入ってる」

「えー！わたし、そんなにがさつかな？？」

がっかりしたように彼女が言う。

「男タイプは何もがさつって意味じゃないよ。

普段ぼくらが使ってるような、男っぽい、女っぽいとはちょっと意味が違う。

男タイプ— 積極的！ 発散！！ 外側が大事！

女タイプ— 受け身 取り込む♡ 内側が大事♡

つまりさ。自分の内側よりも外で起きていることに関心が向いたり、外に向かって積極的に行動したり。そんな質が男タイプってこと」

「ふーん…。人と話たり、外に出て動き回ったりするのは好きかも…。

でも…結構くよくよ考えちゃったり、内にこもっちゃうこともあるよ？」

木野さんは少し言いづらそうに言葉を返した。

「そうだね。女タイプは外でなく内側に目が向いている。自分が大切に思ってる人や物。何を手にできて、何が手に入らないかを観察する。内面で起こる、気持ちの変化なんかも大事にするんだな。

木野さんの場合、天体四つは女タイプのサインに在るからね。こちらの要素も同時に持ってるんだ」

「そっかあ。どっちもあるのね」

「そして二つ目の視点。

季節の初め、季節の中頃、季節の変わり目の 3 区分。

【季節の初め】活動宮

—スタートさせるの大得意！ 迷わず G O G O !

1

2

3

4

5

6

7

でもちょっぴり飽きしょうかも

【季節の中ごろ】不動宮

―続けるの大得意！ コツコツ繰り返して定着だ！

でもちょっぴりガンコかも

【季節の変わり目】柔軟宮

―合わせるの大得意！ 希望を聞かせてくださいな♪

他人次第って言われちゃうかも

季節の初めはスタートの時期。

ほら、仕事とか、学期とか。たいてい何でも季節ごとに始まるだろ。衣替えしたりして、気分一新するのもこの時期じゃん。

この時期に当たるサインを『活動宮』と言って、ここに沢山天体が在る人は、何かをスタートさせるのが得意なんだ。自分の力で道を切り開いたり、周囲を引っ張っていったりする。

季節の中頃に当たるサインは『不動宮』。

変化はないけど着実に、何かを定着させていく時期だ。

ここに天体が多い人は、続ける力、持久力があるんだな。物を作ったり研究したり。自分の信じた道を突き進んだり。思想とか、そういうものを広めたり。

こういうことって継続が大事だろ？ そんなパワーを持っているんだ。

そして最後は『柔軟宮』。

季節の変わり目の時期だから、気候の変化に合わせて、対応する。

春先、暖かくなってきたと思ったら夜は急に冷え込んだり。それに合わせて着るものや食べ物、^{りん き おう}臨機^{へん}応に決めたりする。

これを人の質に置き換えると、周囲に合わせて対応する、そんな力を示してる。

何とか相手の要望を形にしようと努めたり、状況の変化によって対応を変えたり。相手の感情をくみ取って応じたり。柔軟宮にたくさん天体が在る人は、そんな力を持ってるんだ」

木野さんは、目をぱちくりさせている。

自分なりに勉強し、まとめた内容を伝えてみたけれど、この説明で分かったかな…。

少し不安になって、ぼくは一呼吸を置いた。

「…ここまでで、質問ある？」

「うん、今のところ大丈夫。で、わたしはどこに天体が沢山あるの？」

前のめりになり、そう返す彼女。ぼくは頷き彼女のチャートに目をやった。

「木野さんは、活動宮 5、不動宮 1、柔軟宮 4」

「えー！ やり抜く力なさすぎじゃない！」

と、^{かんぱつ}間髪入れず声を上げる彼女。

ぼくは面白そうに彼女を眺め「結構、無いトコに目が行くんだね」と言った。

「え…」

ドキリとしたような表情で、こちらを見返す。

「あ、ごめん。木野さんはつまりさ。何かをスタートさせる力や、場の雰囲気や方向づけする力。そんな『活動宮』の力が強いってこと。どう？」

「ん…そうかな。自分では良く分からないけど…」

「えーそうなんだ！」

意外過ぎて、少し大きな声をあげてしまう。

木野さんはクラスの中でも特別に華がある。

「ねえ、こうしょ！」と彼女が一言発すれば、パッと皆の気持ちがそちらに向く。

クラスで少し浮いてる子や暗い子が、口の悪いヤツにいじられても、明るい笑顔でぜーんぶ冗談にしちゃうから、場の雰囲気^{かたよ}が変な方向に偏っていかない。

「木野さんのリアクションで空気が切り替わったり、いい方向に進んだり。見てると、そういうことよくあるよ？」

「…全然分かんない。わたしただ、おしゃべりしてるだけだけど」

自分の魅力に無自覚でいるってこういうことか…。

ぼくはマジマジと彼女を見つめ、言葉を続ける。

「オッケー。まあまずは、自分にはこの質があるって、頭の片隅^{かたすみ}にひっかけといて。

…そしてこれを見ると、柔軟宮も結構、強い」

「相手に合わせる力かあ…。これも分からないなあ。

わたし予定変更って苦手なの。

みんなでプールに行く約束して、色々準備するでしょ？全員分のデザート作ってみたりとか、おしぼり人数分用意したりとか。

なのに朝になって、『今日は肌寒いから映画にしよう』みたいな話になるとイライラしちゃうの。

変更するならもっと早くしてよ！とか思っちゃう。

^{りん き おうへん}
臨機応変とかホント無理」

デザートとかおしぼりとか用意しちゃうんだ…。ばくなら絶対に予定変更なんてしない…。

危うく妄想が始まりそうになるのを抑え、真面目な顔つきで頷いて見せる。

「それはもしかしたら、三つ目の視点で分かるかも。

火・地・風・水の4区分」

【火】精神

— 独立独歩！ 志高く上を向くっ！

理想論だって？ オレが決めたことに

ゴチャゴチャ言うねいつ

【地】肉体（五感）

— 形にする。見える化する。

リアルっ大事！ ちゃんとうたしに

利益はあるんでしょうね??

【風】思考

— 学ぶ、伝える、楽しいな♪

一人に肩入れムリー！ 何でも軽やか、

重い責任は二・ガ・テ♪

【水】感情

— ハートで繋がりがびたっとシンクロ♡

愛してるからこそクヨクヨ。

重たいなんて言わないで♡

「これはね。それぞれの特色を理解するとよくて。

火はぼくら人間にとって、時折太陽の代わりを果たすだろ？ 熱をもたらし、光となって先を照らしてくれる。

だからね。火の質の人は何か崇高な目的に向かって、頑張ることが得意なんだ。

火は上に向かって燃え上がる。志ってのは天に向かって掲げる^{かか}もんじゃん。だからある意味じゃ彼らは理想主義者でもある。

そして火は近づくものを燃やしてしまう、寄せ付け

ないって特性もあるから。

人が依存して寄っかかってきたり、考えを押し付けられたりってことにストレスを感じやすい。自分が独立心旺盛な分、人のそんなところが苦手なんだ。

こんな特徴があるから、火は人間の『精神性』を表すと言われてる」

ぼくは一息つくと立ちあがり、辺りを見回した。

ロッカーの上の、ベゴニアの植木鉢に目が留まる。

「木野さんは、植木鉢が何で出来てるか知ってる？」

「え…粘土かなんかかな？」

「そうだね。たぶんこれ、元は土で出来てる。

つまりさ。土は一度固めてしまうと、もう形が変わらない。そしてこうやって手で触れることも、目で見られることも出来る。植木鉢として、ちゃんと実用性もある。

こいつを人の質に置き換えると…。

地の質は現実主義者が多いってこと。自分や周囲の利になるのか。社会で成り立っているか。物やお金など、実際にこの手にできるのか。そんなことが大事なんだ。

その分、社会で結果を出すのが得意だし、それがなきゃいくら立派な理想を掲げたって意味が無いとも思ってる。

そして形が変わらない分、ちょっぴりガンコだ。だってもう固まって、変えられないって質があるから。

火・地・風・水は、人間の四つの要素を表している。

地は形あるもの、つまり『肉体』。肉体には、見たり聞いたり匂いをかいだり、そんな感覚が備わってる。だから同時に『五感』って意味も含まれるんだな」

「ふーん…」

木野さんは頷いて、自分のチャートに目を落とした。「自分の質が気になるよね。木野さんの天体が一番た

くさんあるのは風のサイン」

「風は『思考』かあ…。そんなに考えること、好きじゃないけどな」

ぼくは植木鉢を置いて立ち上がり、窓を開けた。

涼やかな風が入ってくる。西日で熱っぽかった教室は、あっという間に新鮮な空気に包まれた。

「『風の噂』『風通しのいい関係』『風の便り』…。

風を例えにした言葉ってたくさんある。これぜんぶ、言葉やコミュニケーションを示すよね。

つまり風の質の人達は、そんな力に長けてるんだ。

そして風は人間で言うところの『呼吸』に当たる。呼吸は体内に風を送り込むことだからね。

深い呼吸をすると、意識がハッキリし集中力が湧いてくるだろ？

木野さんはピンとこないかもしれないけど、やっぱり学ぶことや人に教えることが、得意だったりするんだよ。

風はあらゆる場所に万遍なく吹く。逆に一处に滞ると、不快な感じがするだろ？

つまりさ。一人の人に肩入れしたり、べったりした関係は苦手なんだ。もしかしたら時々八方美人って言われちゃうかもしれない。

そしていつも風のように軽やかでいたいから、重い責任も苦手」

「あーそれ！分かる！ママにいつも言われるの。お前は誰にでもいい顔するって…」

「はは、そうなんだ」

「わたしはただ、誰か一人の味方になるのが嫌なだけなのに…。

風の質かあ。言われてみればそうかもな。

友達は多い方だし、ケンカした子達をとりなしたり

するの、結構得意だし」

「それだよ、それ！ コミュニケーションのセンスがめっちゃうちゃ、あるんだよ」

木野さんは嬉しそうに微笑んで「あと、自分の好きなことなら結構集中して勉強するかも」と付け加えた。「だろ？」

ぼくはにわかに自信が湧いて、「次は水、『感情』」だそう続けた。

「水はさ。無色透明で色を混ぜたらいくらでも染まる。コップに入ればその形になるし、茶碗に入ればそこに治まる。

つまりさ。相手に染まる、相手の色や形をコピーする、そんな質があるんだ。

映画観てて、主人公が悲惨な状況になったらイチイチ気持ちを理解しようとしなくても、自然に悲しくなったり腹が立ったりするだろ。

人って知らない間に他人の感情に影響を受けてる。いつの間にか相手の気持ちをコピーして、同化してるんだ。

水の強い人は、人の痛みが分かったり感情を察したり。優しく育んだり癒したり。そんなことが得意なんだ。

そしてね。相手の動きや技術をコピーする、なんて力も秘めている。

水って物理的に重いだろ？ この『重さ』を人の質に置き換えると…。

『あんたのために言ってるの』なんて過剰に心配したり、相手をコントロールしようとしたりする。

心に寄り添う分、自分の想いを押し付けて人を変えようとする。

時にそんなことも引き起こしてしまうんだよね」

ぼくは言葉を続けた。

「火は風にあおられ大きくなる。だからこの二つは仲がいい。

2 区分で言えば男タイプ。

水は土の入れ物の中で安定する。だからこの二つは相性がいい。

2 区分で言えば女タイプ」

^{とうとつ}唐突に木野さんが言った。

「もしかして岡田くんって、水に天体が結構ある？」

「えっ！」

不意を突かれ、ぼくは声を詰まらせた。

「そう…見える？」

「うん。だってすごく優しいし、思いやりあるじゃない」

「…そうかな」

「そうだよ！ 自分で気づいてないの？」

と、不思議そうに言う彼女。

「え…木野さんだってだろ！ いろいろピンとこないって、さっき言ってたじゃん！」

思わず切り返すと、木野さんはきょんととしてこちらを見返した。

「そっか。これって自分のことは分かりにくいのかな」

「うん…。そうかもしれない。

でもだからこそ、きちんと知って使うことでもっと自分を好きになれる」

「…自分を好きになる？」

木野さんはそう言って目をしばだたかせた。

「例えばさ。さっき臨機応変が苦手って言ってたろ？」

柔軟宮に月と金星があるのに、人に合わせられないって」

「うん。…あんなことくらいでいちいちイラつくの嫌だなんて思うけど…」

1

2

3

4

5

6

7

と眉間にしわを寄せる彼女。

「それはさ。きっとよほど皆のこと考えて、キッチリ用意したからだと思うんだ」

木野さんは机に肘をつき、聞くともなく聞いている。

ぼくは慎重に言葉を選びながら彼女の想いを出来るだけ感じ取りたいと思った。

「木野さんの月と金星はおとめ座にある。

おとめ座ってほら、柔軟宮でもあるけど地の質だろ。唯一形が変わらないもの。

皆のことを考えてしっかりと準備した。デザートはもうジュースに変えられないし、おしぼりだって…。場所が映画館ならどっちも何だかちぐはぐだ。

何が言いたいかって言うとき。木野さんが用意したもののって、今さら要らないって言われても変えることができないものばかりなんだよ」

彼女の横の髪が少し落ち、瞳は隠れ表情が分からない。ぼくはそのまま言葉が続ける。

「おとめ座の質を一言で言うと…

— キッチぴしっ きっちりこなせてるか、ああ心配…。

つまりさ。今さら変えようのない形あるものを、自分なりに完璧に準備した。それが喜んでもらえるか。本当に必要なものなのか。そんな心配までしてるんだ。

それを簡単に反故にされたら、そりゃ傷ついて当たり前なんじゃないかな」

言葉を切り、見えない横顔をじっと見つめる。

開け放した窓から風が入り、彼女の髪がまた少し乱れた。

いつもなら、すぐ髪をかき上げ笑顔を見せるだろうに

動かない。ぼくは少し心配になった。

「…傷ついて、当たり前かあ」

木野さんが、ぼそりとつぶやく。

そして「あれ…やだな」そう声をもらしたかと思うと、ポタリッと膝に光るもの。言う間に彼女は両手で顔を覆い、何とその場で泣き出したじゃないか！

「ど…どどどうしたの？」

立ち上がり、オロオロするぼく。

それでも彼女は顔を上げない。それどころか小さく嗚咽を漏らしながら、肩を震わせさらに激しく泣き始めた。

ぼくはどうすることも出来ない。彼女の肩に触れることも、気の利いた言葉をかけてやることもできず、ただただその場に立ち尽くした。

23. 木野さんの月の声

夕日は傾いて、窓から入る風が少し冷たい。

ぼくは黙って彼女が落ち着くのを待った。椅子に腰かけ深呼吸する。

窓の向こうの鮮やかな夕焼けを眺めていると、焦る気持ちは少しずつ引いていった。全てはいい方向に行っている。不思議だけれど、ぼくにはそれが分かった。

どのくらい経っただろう。

木野さんはゆっくりと顔を上げ「はあ…泣いたあ」そう独り言した。

カバンからハンカチを取り出し、濡れた頬をぬぐう。顔にはやや赤みが残りと、瞳はまだ潤んだままだ。

けれどその目は、すがすがしい光を宿していた。

「…やられたなあ。岡田くん」

小さく笑って、そんなことを言う。

「オレ、何かやらかした？」

わざと軽い口調で答えると、木野さんはふふっと笑って「やらかした、やらかした」と言葉を返した。

ぼくは知っていた。

内側に芽生える相手への不満や批判感情。そしてそんな自分を責めることで、またさらに苦しくなる。

だけど本当は…。

月・心をとことん感じていったなら。相手への想い、愛情に、きつと辿り着く。

その感情を誰かが汲み取ってくれたなら。その想いに自ら気づく事ができたなら。ぼくらは初めて自分自身を、本心から赦すことが出来るんだ。

そして自分を、相手を、また一步愛おしいと思える。

月・心の本当の想いに気づかないまま、自分を、誰かを責め続けている人が、一体どのくらいいるんだろう。

＊

「わたしね。ヘアメイクアーティストになりたいんだ」

帰り道、肩を並べて歩きながら木野さんは言った。

辺りはすっかり暗くなってクラブを終えた生徒達も、もういない。彼女がためらわず夢を口したのは、人気の少なさもあったのだろう。

ぼくは微笑み、「すごいな。もう成りたいものが決まってるんだ」そう答えた。

「うん。大好きなファッションデザイナーさんがいてね。東京コレクションで、彼のショーのメイクやヘアを担当するのが夢なの」

「東京…コレクション？」

「ファッションショーの一つだよ。岡田くん、そういうの興味ないでしょ？」

「うん」

その返事をたいして気にする様子もなく、彼女は朗らかに笑った。

「でもね。調べたらヘアメイクの学校って全国に200以上あるの。そこに毎年何十人も入学するのよ？毎年だよ？」

ものすごく大勢の人がヘアメイクアーティストを目指してるってことでしょ？

そんなたくさんの中から勝ち抜くなんて…現実にはとても無理、なんて思ってたの」

黙って、彼女の話に耳を傾ける。

内容よりも彼女のウキウキ感が伝わって、自然と顔がほころんだ。

「だけど…。ひょっとしてこんな風に現実的なことばかり考えちゃうのも、わたしの月がおとめ座にあるせいなのかなって…」

ぼくは頷いた。

「そうだね。おとめ座は地のサイン。リアルが大事だよね。それにどうやら全てのサインの中で一番完璧主義みたいだから…。出来ても出来てないって、自分を厳しく律しやすいんだと思う」

「そういう風に、無意識に思っちゃうってこと？」

「ああ」

「わたしの場合、トキメキ担当の金星もおとめ座よね？これはどう働いてるの？」

「…どう思う？」

モックまの真似をして、尋ね返してみる。

「趣味とか遊びとか、何してるかってことよね…」

木野さんはしばらく考えて、「好きなモデルやデザ

イナーの、ファッション写真を切りぬいたりしてる…」と答えた。

ぼくは思わず吹き出して、「そんなことしてるの？意外！！」と言うと、「えー楽しいよ。あとメイクやヘアの道具、買ったりするのも好きかも」と彼女。

「なんかすごいキチッと手入れしてそう…」

「してるー！自分のだけじゃなくて、ママのも時々整理してるもん」

「まさにおとめ座って感じだね。それにさ。友達と遊びに行くときのマメな感じ。あれもおとめ座の金星が働いてるなーって思ったよ」

「そっかあ…」

木野さんは深く頷いて、「面白いね、星の使い方」と微笑んだ。

「正直まだ、これで夢が叶うって言われても分からないけど。おとめ座に天体があるなら、完璧にやろうって努力するのが得意ってことでしょ？」

そう思ったら少し勇気出てきた

「その調子だよ」

「それにわたしのチャート見たら、すごーくたくさんてんびん座に星が入っててびっくり」

「てんびん座の質は『オシャレ大好き』だもんなあ。木野さん、そのまんまじゃん」

「ねーっ！ここにこんなにいっぱい天体が在る人も、きっと少ないよね？！」

「うん。きっとそうだ」

そう答えると木野さんは、はしゃいだように話を続けた。

「水星がてんびん座にあるってことは、オシャレに關する勉強が得意ってこと？」

「てんびん座は風のサイン。

風はそもそも思考を司るし、何か一つに偏ることなく学ぶこと、それを実際に使うのも、得意だろうね」

「太陽は『自分の表現したいこと』が、てんびん座的って思ったらいいんでしょ？」

「そうだね」

「そこにパワーの火星もあるんだもん。夢に向かってまっしぐらって感じよね」

「てんびん座は人付き合いも上手いから、そこにある火星を使うなら、人の輪の中で頑張るのもいい。切磋琢磨することで、やる気に火がつくかも」

「そうかあ…」

目を輝かせて語る彼女が、ぼくは少し羨ましかった。

やりたいことが決まってい、ネータルチャートは明らかに、そいつを後押ししているように見える。

それに比べて自分のチャートはどうだろう。

いったい夢が何なのか、どこに向かっているのか、ちっとも想像できやしない。何だかずいぶんと不公平に思えた。

「ねえ、明日はもっと詳しく教えてくれる？」

「ん…ああ。もちろん」

我に返り、そう答える。

木野さんはすっかり星の使い方が気に入ったらしく、「明日は三沢先生も誘ってみようよ」と楽しそうだ。

今夜の星のレッスンを、二人の夢に役立てばいい。ぼくはそう自分に言い聞かせた。

24. 「君の夢は〇〇だ」とモックまに名言される

家に帰りチョビの散歩を済ませると、ぼくは夕飯を盆に載せ自室に戻った。

今日は母さんの仕事が遅番で、夜 10 時を過ぎるまで戻らない。姉ちゃんもアルバイトで居ないから、ぼくには好都合だった。

部屋ではモックまが、タオルを重ねた自分用のベッドに横になり、おやつ^{ほお}の栗きんとんを頬ばっていた。「お帰りー。ずいぶん遅かったじゃないか」

と手を挙げる。ぼくはそれには応じないで、盆を勉強机に無造作に置くとドサッとベッドに横になった。

「何かありました、と言わんばかりだね」

「…もっと優しい声がけとか、できないの？」

うつ伏せのまま、そう答える。

「まあ落ち込むのは君の自由で、それを心配しないのも、ぼくの自由だからね」

ぼくは勢いよく飛び起きて「何それ？ 木星人ってみんなそうなの？」と尋ねた。

「さあ。それは分からないが、優しい言葉をかけて欲しいなら『気落ちしていて相談にのって欲しい』そうハッキリ言ったらいいと、ぼくは思うがね。

水の強い人はなまじ共感能力があるものだから、それを他人にも求めやすい。だがぼくはハッキリ要望を口にしてもらった方が、正直楽だね」

言われて大きくため息をつく。ベッドの上に起き上がり、あぐらをかいた。

「…あのさ。夢って誰でも持って生まれてきてるのかな？」

ぼくの皿からトマトをつまみながら、さも当たり前と言わんばかりに頷くま。

「人生の目的。夢。この世で何をして還^{かえ}るのか。

言い方はなんでもいいが、全ての人間はそいつを決めて、生まれてきている」

「…じゃあさ。早くから夢に気づいてる人、そうでな

い人の違いは何なの？」

「まあ色んなケースがあるけどね。水星期で早々夢に目覚めると決めてきた人。かと思えば、太陽期は色んな迷いを経て火星期によりやく本道に乗る人。

消極的なパターンじゃ、とうに気づいていいはずなのに、自分の星をてんで使わないで『夢なんてくだらない』そう思って生きてる人。後はそうだな。

金星から太陽期、太陽から火星期へ移る中で、夢が変わっていく人もいる。

そんな人は『途中で夢が分からなくなった』なんて経験もするかもしれない」

それを聞いて、ぼくはさらに気持ちが沈むのを感じた。

「死ぬまでに夢をいくつも持てる人もいるんだ…」

「この世で多様な生き方をする。きっとそう決めて来てるんだね」

「なんかお前の話聞いてると、『生まれる前に意識がある』って前提みたい…」

「まあね。西洋占星術じゃその辺りはぼんやりとしているがね」

ぼくはため息をついた。

「…ぼくも何をするのか決めて来てるのかなあ」

「もちろんだとも」

「…だったら、さっさと知りたいよ」

「はははっ」

「今笑うとこ？」

顔をあげ、恨めしそうにモックまをにらむ。

「失敬^{しつげい}。ぼくには君が、経験や体感と共にたましいの喜びに目覚める、そんなシナリオを用意して生まれてきたように見えるのでね」

「なんだよ、それ。そんな回りくどいのいらないよ。」

1

2

3

4

5

6

7

ぼくだって木野さんや三沢先生みたいに、これって言う夢を早く知りたい。

その辺りをさ、手っ取り早く読む方法って無いの？」
「まあ、あるにはあるが…」

「えっそうなの？！」

ぼくは飛び上がって、モックまに詰め寄った。
「人生の目的。夢。そのヒントになるポイントが、確かにある」

「おいおい、何のじらしだよ！ いいから早く、ちょうだいちょうだい！」

「別に構わないが、一体何でそんなもの先だって知りたいんだい？」

「はあ？」

ぼくは眉間にしわをよせ、声を上げた。
「そんなものって何だよ。あんだけさ、太陽期に夢を見つけれなきゃ土星期は死亡フラグ立ちますーみたいなこと言っといて」

「そんな表現をした覚えは一度たりとも無いんだが」
「とにかくモックま的には『夢』を持つって超大事なことなんだろう？」

だったらさっさと、ぼくの夢とやらを教えてよ」
そう言うと、ヤツはきよんとぼくを見返しやがて小さくため息をついた。

「やれやれ…どうやら君は、まだ『星の使い方』の醍醐味だいごみが分かってないようだ」

「…なんだよ、醍醐味って」

不貞腐れたように言葉を返す。
モックまは、両手で箸はしを船の櫂かいのように持ち直し、ハンバーグを小さく切り分けると指でつまんで口に放り込んだ。美味しそうに頬張って、ゴクンと呑み込み口を開く。

「じゃあ教えてあげよう、君の夢を。それはパイロットになることさ」

「おい————っ！！」

突然の宣告に、頓狂とんきやうな声を上げるべく。

「何考えてんだよ、モックまっ！ て言うかもうそれ『星の使い方』関係ないじゃん！

『宇宙人のスッゴイ予知』みたいになってんじゃんっ！ ぼくが欲しかったのはそれじゃないっ！！」

「この際『星の使い方』はどうでもいいじゃないか。君は自分の夢を知りたかったんだろ？」

それはパイロットだ。

17才で飛行機に乗る経験をし、その高揚感こうやうが忘れられず必死で勉強。二浪にろうで大学に合格し、その後24才で…」

「わーっわーっわーっ！！バカッ！やめろっ！！」

モックまは言葉を切り、はて？ と首を傾げた。

「夢を知りたかったんじゃないのかい？」

耳をふさぎ半分泣きそうになりながら、モックまをにらみ返す。

ヤツときたらずっとぼけた表情で「で、どうだい？ 自分の夢を知った感想は。ワクワクが止まらないかい？」とたたみかけてくる。

ぼくは怒る気も失せて、「…そんなワケ無いだろ。なんかもう、めちゃくちゃがっかりしているよ…」と答えた。

「パイロットの夢がそんなに不ふ服ふくかい？」

言われてぼくはどう返答してよいか分からない。

パイロットなんて普通に考えれば誰もが羨うらやましがる超カッコいい仕事だ。でも何故かワクワクもしないし嬉しくもない。

だって余りにリアリティが無い。

そもそも今それを知らされて、17才のぼくは初めての飛行機で、そこまで感動できるんだろうか…。

パチンッとモックまは指を鳴らした。

「それさ」

「…え？」

「君は知りたい知りたいと口先では言ってるが、腹の底ではそんなこと、ちっとも望んでやしない。違うかい？」

「・・・」

「そもそも『あなたの夢はこれですよ』『あなたの才能はこれですよ』と情報だけ与えられて、芯からヤル気が湧いてくる人間なんて、いるのかね」

「…だけど、天体たちはスペシャリストで、それはぼくの『強み』とか『才能』とかに言い換えられるんだろ。それを読みとけて言ったのはそっちじゃないか」

ふくれっ面で、そう答える。

「ああ、そうさ。でも何度も言うように『情報』だけじゃ意味はない。それを使って行動し、自分の血肉にする。天体たちを使いこなし成長する。

その経験の中で才能が開き、夢が形になっていくんだ。

西洋占星術は別に自分の夢や才能の当てっこゲームをする道具じゃない」

プイッとそっぽを向き、(そうは言ってもヒントくらい知りたいじゃないか) 心の中でぼやいてみる。

心が読めるモックまに、聞こえよがしに言ったつもりだったのに、何故か届いた様子がない。

ぼくはちょっぴり寂しくなって、ヤツの横顔を盗み見た。

「ぼくは思うんだ。『西洋占星術』ってのはきっと、『宇宙の願い』なんだってね」

「宇宙の…願い？」

「ああ。人の成長を心から願う、宇宙からのギフト。

だからこそ西洋占星術には、そこかしこに『人の成長物語』が織り込まれている」

—占星術に織り込まれた、人間の成長ストーリー—

「…天体の、発達年齢域のこと？」

「ああ。でもそれだけじゃない」

モックまは静かに首を振った。

少しの間、口を閉ざし、今まで学んだことを思い返してみる。

「…分かった。ハウスだ」そう言って、

「1ハウスは確か『自分の軸』。12ハウスは『見えない世界。あの世』だろ。これってつまり、生まれてから死ぬまでを表してる」と続ける。

モックまは微笑んだ。

「よく覚えていたね。でも…最も具体的に、最も豊かに人間の成長物語が描かれているのは、その二つじゃない。12サインだ」

言われても、それがどんな意味を持つのか分からず曖昧に頷く。

「考えてもごらん、しょう太。

単に『人間の成長のプロセス』を教えるだけなら、物語は一つで事足りる。

けれど『西洋占星術』は、その要、10の天体・12のサイン・12のハウス、全てにこいつが描かれているんだ。様々に視点を変えてね。

そりゃもう、ほとんどしつこいくらいさ」

「…それってそんなにすごいこと？」

「すごいと言うより…願いが大きいってことさ」

1

2

3

4

5

6

7

そう言って、モックまは窓の向こうの星空を見上げた。

小さな瞳はガラスのように透明で、瞬きながら遥か遠くを見つめていた。

ぼくは思った。

『宇宙の願い』を知ること。きっとこれが、モックまが生しょうがい涯かけて探求する、人生の目的ってヤツなんだろう。こいつの夢なんだろう。

夢ってのはつまりさ…

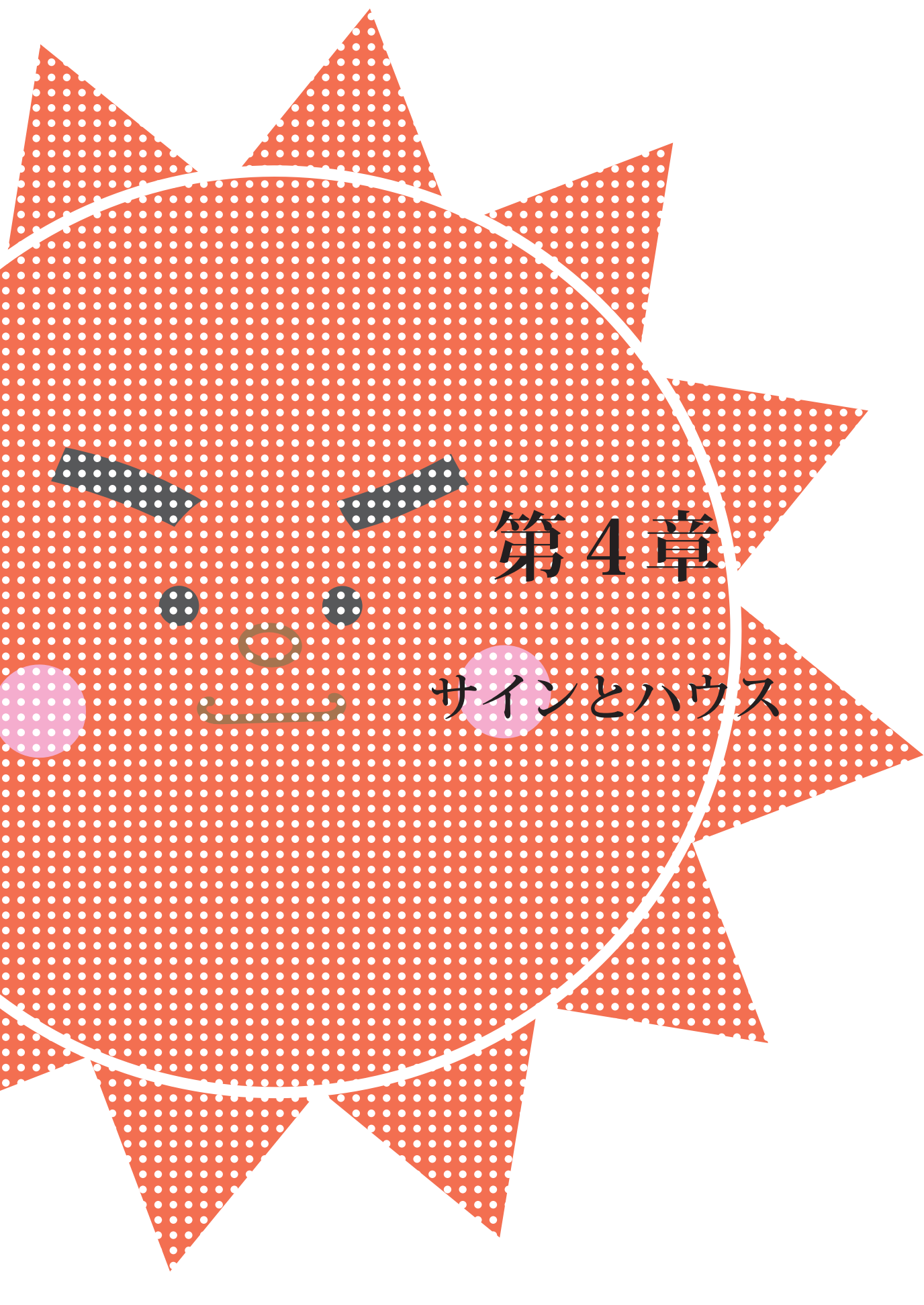
そう切り出そうとしたのに、飛び出してきたのはおどけた様なセリフだった。

「まるで…口うるさい母さんみたいだな、宇宙って」

小さなくまはくすりと笑い、そのまま宇宙の彼方を見つめ続けた。

ぼくはもう何も言わず、モックまと一緒に空を見上げた。

幾万の星々が瞬いていた。



第4章

サインとハウス

25. 12 サインは人間の成長ストーリー

おひつじ座…『直感』

お母さんのお腹から飛び出して、この地球に着地する。すさまじい世界の反転。一体何が起きたんだ？

肉体の感覚も考えることも、心を感じることも、まだできない。

あるのは「ぼくはここに在る」という真実だけ。

いったいぼくは何者なんだ。何を成すために生まれてきたの？

お母さんのお腹の中。その向こうの暗闇。

無の世界からこの世に飛び出てきたぼくは、「無から有を生み出す」ことに強く惹かれる。つまりまだ、「誰もやったことのないもの」に興奮するんだ。

感覚も言葉も感情も知らないから、全ては突発的でスピーディ。直感が働くんだ。

理屈じゃなく、道理じゃなく、ピンときてしまうんだ。そしてね。「自分は何者なんだろう？」ってことが、人生最大のテーマだから。いつだって自分探し。いつだって新たなことにチャレンジする。

そんなフレッシュな感性がある。

でも時々思うんだ。一体この旅はいつ終わるんだろう。ぼくは何を成したなら、やっと満足できるんだろうってね。

おうし座…『所有』

見る、聞く、かぐ、触れる、口に入れる…。

そうやって、「ぼく」と「ぼくで無いのもの」をより分けていく。

この指を口に入れても、そいつを呑み込めやしない。でもおっぱいをちゅうちゅう吸うと、温かくて甘いお乳がお腹を満たしてくれる。ぼくはぼく。お乳はお乳。

そうやって、「ぼくという存在」を認識する。

ぼくの「肉体」を認識するんだ。

肉体は、この世で初めて「所有」するもの。

だからぼくは「自分が何を持っているか」がとても大切なんだ。

肉体には「五感」が在る。そして五感には「才能」が宿ってる。その才能を用いて何をこの手にできるのか。それがすごーく大切なんだ。

自分の感覚を感じきるって、一瞬でできることじゃない。おひつじ座みたいな一瞬の直感に、ぼくは頼らない。しっかりと肉体を感じきる。

だから大抵、ぼくは人よりスローテンポだ。

そして、おひつじ座を通過したばかりのぼくは、いつも視線が「自分」に向いてる。

人のことより「ぼくの感覚」を優先する。そんなことが喜びなんだ。

ふたご座…『言葉』

ぼくがぼくを認識すると…。「ぼくで無い人たちが」気になってくる。

あれは誰？ どうしてぼくより上手くしゃべれて、どうしてぼくより速く動けるの？ あの人を「お姉ちゃん」と言うらしい。あの人を「お兄ちゃん」と言うらしい。

そうか、喉が渴いたら「ママ、お水」って言えばいいんだ。そうか、スプーンを使えば上手くスープが飲めるんだ。

ああ、楽しい。もっとしゃべって、もっと学びたい。
新しいことを、もっと知りたい！

ぼくはこんなエネルギーだから、「情報」に関心がある。

そしてね。おうし座を通過して自分の肉体を得たばかりだから。

興味は全て「手の届く範囲」。自分の属してる業界。関心のある分野。そんな知識をどんどん吸収したいんだ。

何かに役に立つとかそんなこと、どうだっていい。ぼくを動かすのは好奇心。ただそれだけなんだ。

そして存分に知識を得たなら。今度は知らない人に教えてあげる。

何せおうし座を通過したばかりのぼくは子どものように発想がシンプルだ。

だから平たい言葉で表現するのが得意でね。自分の専門分野を、分かりやすく伝えることができるんだ。そしてそれが、ぼくの喜びなのさ。

かに座…『感じる』

いっぱい遊んで帰ってくると、いつも温かいご飯が用意されてる。清潔な衣類と、まっさらなお布団が待っている。

ぼくが最後に戻る場所。心と身体がやすらぐ安全な場所。その場所を守っているのは、お母さん。

「ケンカしたからって、すぐに手を出さないの！」「弱い者いじめはいけません！」

そんな風に、お母さんの考える「良いこと・大切なこと」を、くり返し、くり返しぼくに教えてくれるんだ。そうやってぼくはいつの間にか、お母さんの考え

方、価値観をコピーしていく。

だからね。かに座のテーマは「良きものをコピーする」。

安心安全な自分の居場所で、優しさとか思いやりとか、情緒^{じょうちょ}を育てていく。自分や相手の感情を、深く「感じる」ことを学んでいくんだな。

とは言えぼくはまだ、ふたご座までしか知らないから。自分が経験した範囲の、狭い価値観の中にいる。つまりさ、ちょっぴり主観的なんだ。

その家庭ならではの考え方。その町特有の習慣。その国独特の文化。そんなローカルな価値観にもとづいた感受性を、大切にするんだな。

だから、かに座は「育む」ことに気持ちが向く。

自分が良いと思ったことを、相手の成長を願って教えてあげる。

それは少し独りよがりかもしれないけれど、だからこそ、同じ想いを持った人たちの共感を呼ぶんだよ。

「コピーする力」と「共感力」。この二つがあるからさ。ぼくは「流行を生み出す力」も持ち合わせているんだな。

しし座…『クリエイティブ』

安心・安全な家。その場所が、何だか無性につまらなくなってくる。

ぼく…いやオレはさ。母さんの説教^{せつきょう}よりも、もっと外の世界が見たいんだよ。

今までなにも考えず、ただ言われた通りにやってきた。けどオレは、母さんのコピーになるために生まれてきたんじゃない。

時には勉強をほっぽり出して、恋をしたい。自分だけの何かを表現したい。親の言うことに逆らっても、

例えそれで大失敗してもさ。肚^{はら}から湧き上がってきた欲求に従って、トコトンやりぬきたいんだよ。

何かを自分で生み出したいんだ。

だからしし座のテーマは「クリエイティブ」。自分を打ち出す「意志」の力。

とは言えオレはまだ、やっとかに座の世界を飛び出したばかりだから。

その表現は、客観性ってものがない。

でもそんな事どうだっていい。オレがオレらしけりゃ、それでいんだよ。

この時初めて知るんだな。人に言われたことじゃなくて自分の意志で始めた事は、やる気と集中力が、とてつもなく持続するってことを。

だからオレは自分にとことん集中できる、そんな仕事に惹かれるんだ。この命をフツフツと感じられること。陶醉^{とうすい}できること。

このオレの姿をさあ見てくれって、スポットライトの下に躍り出たくなるのさ。

おとめ座…『奉仕』

ああ…ずいぶん自己陶醉^{おぼ}に溺れた青春を送ってしまった。遊びはもう終わり。私はそろそろ大人になる準備を始める。

個性的なのもいいけれど、エゴを抑え、社会の要望に誠心誠意^{せいしんせい い}、応えていく。自分の長所、短所、経験、未経験^{じっせき}、実績や実力、全てを一つ一つ点検し、分析^{ぶんせき}する。

いや、しし座の私ときたら自分の良い処ばかり主張してきたから。今は「何が出来ていないのか」を漏れなくチェックすることが大切だ。

そう。この私のテーマの一つに「分析」は欠かせない。

しかもだ。しし座の私はいかに熱中するあまり、自分の身体、健康なんてそっちのけ。ここで健康管理の習慣をつけないと、とても社会でやりぬけないぞ。

そんなエネルギーだから。私はずいぶん心配性で、自分や人の「不出来なところ」に目がいつてしまう。一見ネガティブで、批判的に見えるのはそのためだ。

そして、しし座までしか知らない私は「個人の完璧」を目指すから、個人プレイヤーになりやすくついつい視野が狭くなる。

その分、隅々まで目はしが利くものだから細部をチェックをするのが得意なんだ。

そんな私だから本番に至るまでの基盤づくり、下準備^{ちみづ}なんかが得意だ。細かいチェック、分析すること、緻密な作業なんかもね。

人間の基盤は肉体だから、健康管理も私の本領^{ほんりょう}だな。

てんびん座…『美の調和』

根詰めてブラッシュアップし過ぎたかな。仕事って、緻密ならいいってものでもないじゃない。

結局、最後にものを言うのは「人間関係」。

あらゆる人と、つかず離れず適度な距離感を保ちながら、そつなくやることだよ。

てんびん座のテーマはね。「人を鏡にして自分を知る」。

つまりさ。おひつじ座からおとめ座までの間に、自分を磨^{みが}いて成長した人ほど、出会う人の質が変わってくる。

人生中盤までの、自分磨きの結果がここで表れるのさ。出会う人を通してね。

そしてさ。鏡となって、自分の成長ぶりを教えてく

れる、最大の相手。それは人生のパートナー、妻や夫。

だからこの時期を受け持つ私は、「結婚」もテーマの一つ。そのせいもあって、結構、異性に人気があるんだよ。

自己表現をやりきったし座。社会に合わせ、調整したおとめ座。

既にこの二つを通過しているから。クリエイティブな表現が「人からどう映るか」を分かっている。主観と客観のバランス感覚が絶妙で、だから「センス」がいんだよ。

さそり座…『変容』

適度な距離を保ってたんじゃ見えてこない。相手の深くに眠る「本質」を知りたい。

本当に誰かに恋をした時、そんな気持ちになることを私はここで初めて知った。

なにも対象は恋だけじゃない。てんびん座の私みたいに、バランスを保って客観視していたんじゃ、決して分からない世界がある。

今までの経験、今までの価値観、今までの自分をリセットし、相手とピッタリ同化する。そして全てを吸収するのだ。

わたしはここで恋人に、仕事に、研究に、あるいは宗教に、深く深くのめり込む。一回死んで再生し、まったく新しい境地に^{たど}辿り着くために。

同時に自分と同様の変容を、向き合った相手にも一途に要求する。それは行き過ぎると、無意識に人を変えようとする強いコントロールを生むけれど…。

そんなエネルギーの私だから、誰かを大きく「変容」させる、そんなことに情熱が湧く。

公の場では発表できないような「隠された本質」にも関心が向くから、時に人には言えないようなマニアックなものにも^{ぼっとう}没頭する。

その底力は我ながら、計り知れないよ。

いて座…『高い視点』

…やっとのことで^{せいかん}生還したよ。深く深く、どっぷりさそり座の世界に浸りすぎた。広い視野を取り戻すため、一度空から全体を見てみよう！

ふむふむ、私はこの業界じゃこの辺りにいるんだな。自分ではトップクラスのつもりだったけど、なんだ、中の上じゃないか。とは言え、どうせ高見に^{ひしゅう}飛翔して、世界を大きく見渡すことができたんだ。

夢はでっかく！話もでっかく！

高い視座に立って見えてくるのは、人類の歴史や未来の展望だ。

だから私は歴史からよく学ぶ。大きな視点を持っているから宇宙論や哲学的な話も大好きだ。時間をさかのぼって見通す力があるために、長期計画もいとわない。より大きく夢が膨らんで、返って胸躍るくらいさ。

何せさそり座の一途さに、ちょっとうんざりしているから。

何事も臨機応変に対応し、恋も学びも仕事だって、相手によってクルクル対応するくらいでちょうどいいと思ってる。

まあ少し気が多いけど、これも^{あいきょう}愛嬌！世の中とことん楽しまなくちゃ。

現実的な結果より、100年後の未来に^は馳せる想いが強いから。ビジネスよりも「理想」、お金よりも「人類の発展」に強い関心が向く。とにかくチャレンジ精

神旺盛^{おうせい}で、なんでも果敢^{かかん}に挑戦する。

そんな欲求を満たすことなら、仕事も学びもスポーツも、難なくやりこなす自信があるよ。

やぎ座…『使う』

夢を語るばかりでは現実是不変^{ふへん}わらない。

ビクマウスないて座の私を、ここで卒業するので。社会では結果を出して初めて認められるのですから。

既に私はおひつじ座からいて座までを通過し、あらゆる視点を手に入れました。

感情に流されず、知性に遊ばず、信念ばかりにとらわれず、現実化のために働きます。

自身の能力と限界。人の能力と限界。

それらを冷静に見極めて、適材適所^{てきざいてきしよ}に人を割り振る賢さがある。個人プレイで成せるものは限られていますから、賢明^{けんめい}に『人を使う』と言うわけです。

だから私は『組織化』『合理化』が得意です。

形あるものに価値観を置きますが、決してそればかりではありません。

既に 12 サインの後半に差しかかり、人間の成長は精神面も大切であることを知っているからです。

先人たちが築きあげた伝統。その国、その民族の文化、文明を重んじる。これがわたしのスタンスです。

そのため私のエネルギーは、少々古風でどこか威圧^{いあつ}的かもしれません。

それは私自身が優れた権威^{けんい}となって人々を引っ張って行く、そんな志があるからなのです。

みずがめ座…『革新』

やぎ座の私の発想は、もう古いと思うんだな。

退職し、海外で余生^{よせい}を過ごすうちに、視野がずいぶん狭^{せま}かったことに気づかされたよ。あの考え方は自国でしか通用しないし、自分の会社でしか通じない。

つまり特定の場所でしか、使えないってことさ。

だいたいやぎ座の私ときたら。自分がピラミッドの頂点に立つのが前提だ。

私はこれにもの申したい。全ての人々が分け隔^{へだ}てなく平等に、「愛と自由」を獲得できる。先人たちの知恵よりも、未来を創る若者たちを主役にするんだ。

正直私は、やぎ座が築き上げたこの社会を一部壊すのもいとわない。あらゆる常識という名の前提を、くつがえしたい。そんな「革新」の欲求があるんだな。

そういう意味じゃ「インターネット」の普及はこれに大いに役立ってくれた。

ネットは「場所を超える」画期的なツールだ。会社ありき、組織ありきのやぎ座社会を、あっという間にひっくり返した。

貧乏人も金持ちも、女も男も異国人も、同じ目的のために繋がって、能力とやる気次第でいくらかでも発展できる。全ての人に平等に、チャンスが与えられたんだ。

まあその分、自己責任が、問われはするけどさ。

こんなエネルギーの私だから、枠組みを超えた新発想にワクワクする。

そして、国や民族といった囲いはずし、人類全体の未来を見つめているから。自然環境や人権問題など、より高次の意識で活動する、そんなパワーも湧いてくるのさ。

うお座…『神秘』

長い旅が終わろうとしています。そろそろ、あの世へ還る準備を始めましょう。

おひつじ座からスタートし、ついに最後の章に辿り着きました。

やぎ座が取りこぼした「組織のはみ出し者」。みずがめ座が取りこぼした「能力を発揮できない者」。この全ての人々を抱きしめる、両の腕を持っている。それがわたし。

あなたの心の痛みを分かち合い、慰めることもいけません。もし重荷であるならば、その痛み、わたしの中に置いていきなさい。

心配しなくとも、もうあと少しであちらの世界へ参ります。あなたの痛みを受け取って大地に還す、そんな力があるのです。

わたしは既に『見えるもの』より『見えないもの』との繋がりが勝っているのかもしれません。

人の感情、虫や動物や花々のささやき、精霊たちの繊細なエネルギー。そんな、声なき声を感じられるのです。

わたしは夜見る夢と仲良しで、そこから幾多の知恵をもらいます。肉体を離れ、あの世に近い場所まで登り、天の叡智を受け取ってくるのです。

おかげでわたしは、肉体とたましいの境目が分かりません。あなたの感情やたましいと、ふと気が付くと一体化しているのです。

そんなわたしですから、見えないもの、癒し、スピリチュアル、自然、美しいもの、ファンタジックな世界に、大変興味を惹かれます。

いつも天からのインスピレーションを受け取り、導

きによって生きています。

そして、あらゆる弱き人々の、癒しの存在でありたいのです。

26. 12 サインを完璧に理解する

12 サインが示す人の成長物語。そこには一人の人間の壮大な人生が描かれていた。

このストーリーで言うならばくはまだ、かに座かしし座辺りだろうけれど、未来に向けてこんな道しるべが用意されているのなら、ずいぶん心強いような気がした。

モックまが言った。

『『夢を持つ』と言うのは、この成長ストーリーを積極的に生きたときに訪れる、一つのプロセスにすぎない。』

君にできるのは『精一杯今を生きる』それだけさ」

「それって…天体を使って生きるってこと？」

「ふむ。そういうことになるかな」

「一つ疑問なのはさ。この成長ストーリーが12の質に影響しているとしたら、おひつじ座、おうし座はすごい子どもっぽくて、やぎ座やうお座は既に大人、そんな違いがあるのかな？」

「ふむ。まずは12サインが示している成長ストーリーと『サインの質』。

こいつを切り分けて考えることさ」

1

2

3

4

5

6

7

2 サイン

成長の
エネルギー

12 区分

基本型
(太陽の動き)



成長

= 12 の欲求

基本の型											
太陽の動き	12 サイン										
	数 順番	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	空間 黄道 (太陽の通り道)	0°	30°	60°	90°	120°	150°	180°	210°	240°	270°
	時 季節	3/21~	4/20~	5/21~	6/22~	7/23~	8/23~	9/23~	10/24~	11/22~	12/22~

成長 ストーリー ↓ 欲求 (エネルギー)	赤ちゃん・子どもの時期	思春期	大人の仲間入りの時期	大人・お年寄りの時期
	『直感』 生まれたてのエネルギー 『所有』※1 五感的満足の欲求 『言葉』 スピーディな情報収集の欲求 『感じる』 『良いもの』のコピー欲求 『自己陶醉』※2 自己陶醉のエネルギー 『奉仕』 『完璧』のための調整の欲求 『美の調和』 主観・客観のバランス欲求 『変容』 同一化による支配・探求の欲求 『高い視点』 広い見聞への欲求 『使う』 権威・リーダーシップの欲求 『革新』 場・空間・既にあるものからの自由欲求 『神秘』 同調による癒しのエネルギー			

※1 所有とは（しゅゆう）とは、自分のものとして、持っていること。

※2 自己陶醉（じことうすい）とは、自分自身の言動や志などに対し、うっとりとして、ひたること。

※3 主観（しゅかん）とは、自分の個人的な視点で物ごとを見ること。客観（きやくかん）とはこの
反対語で、個人的な意見・とらえ方をはずし、「外からの視点」で物ごとを見ること。

※4 同一化（どういつか）とは、自分と他人など、異なる二つのものをまるで同じもののように見なすこと。

※5 権威（けんい）とは、他の人たちを従わせるような、強い力のこと。

「基本的には火・地・風・水の4区分や、季節のエネルギーの3区分と同じ考え方だ。

『成長』の視点で『人間の欲求』を12に区分している。

確かに前半サインに多く天体のある人は、ピュアで子どものような魅力がある。中盤のサインは思春期のようなフレッシュな魅力があり、やぎ座以降になると思慮深く、どっしりした魅力を備えていることも多い。

けれどそれは単にエネルギーの表れ方であって、う

お座は既に成熟していて、おひつじ座はずっと未熟、ということじゃない。

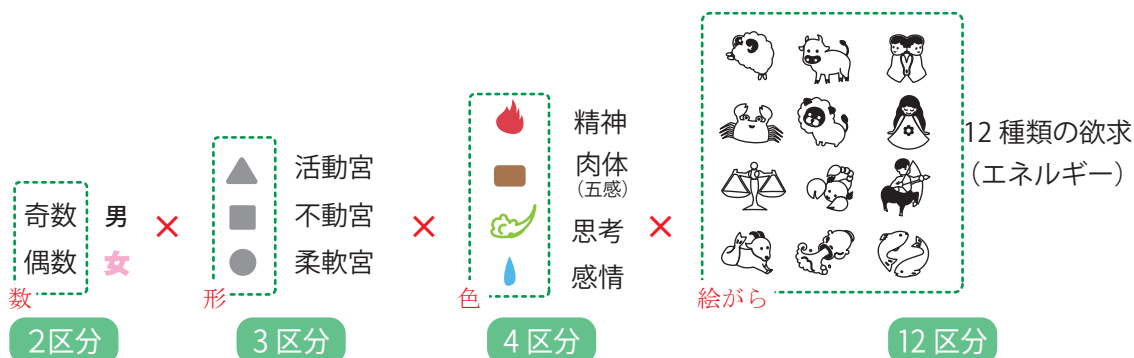
どの質の持ち主も、経験を通じ成長を重ねることが求められる」

「正直さ。今まで習った三つの分類だけじゃ、イマイチよく分からなかったから。なんかやっと腑に落ちたって感じ」

「うむ。ここまでをもう一度整理しておこう」

2 サイン

まとめ-2



この4分類のかけ合わせで、12の質、キャラクターが生まれました。



2 サイン

12 サイン早見表

こちらが
サインの
最終型さ！



 1 おひつじ座	男 ▲ 🔥 『直感』 生まれたてのエネルギー ぴんっときてパツ！突発的！	 7 てんびん座	男 ▲ ☁️ 『美の調和』 主観・客観のバランス欲求 オシャレ好き！人付き合いは とっても軽やか♥
 2 おうし座	女 ■ ■ 『所有』 五感的満足の欲求 ゆっくりじっくり感じながら 作るんだ	 8 さそり座	女 ■ 💧 『変容』 同一化による支配・探求の欲求 ハマったが最後、やりぬく、 そして愛し抜く…
 3 ふたご座	男 ● ☁️ 『言葉』 スピーディな情報収集の欲求 「ねえ、どちてどちて？」 好奇心いっぱい！	 9 いて座	男 ● 🔥 『高い視点』 広い見聞への欲求 あの星を手に入れるっ！ 話も夢もでっかく！
 4 かに座	女 ▲ 💧 『感じる』 「良いもの」のコピー欲求 「よしよし、いいこね」 お母さん気質♥	 10 やぎ座	女 ▲ ■ 『使う』 権威・リーダーシップの欲求 さあ、どーやって結果出して いきましょうかね
 5 しし座	男 ■ 🔥 『クリエイティブ』 自己陶酔のエネルギー そう、わたしは主役！！ だって主役だからっ！	 11 水がめ座	男 ■ ☁️ 『革新』 場・空間・既にあるものからの 自由欲求 常識？壊すためにあるんでしょ？
 6 おとめ座	女 ● ■ 『奉仕』 「完璧」のための調整の欲求 キチッぴしっ ちゃんとこな せてるか、ああ心配…	 12 うお座	女 ● 💧 『神秘』 同調による癒しのエネルギー 君が悲しいとぼくも悲しい…あれ… そもそもどっちの感情だっけ…

奇数 = 男	積極的！ 発散!! 外側が大事！
偶数 = 女	受け身 取り込む♡ 内側が大事♡

▲ 活動宮	スタートさせるの大得意！迷わずGOGO！ でもちょっぴり飽きしょうかも
■ 不動宮	続けるの大得意！コツコツ繰り返して定着だ！ でもちょっぴりガンコかも
● 柔軟宮	合わせるの大得意！希望を聴かせてくださいな♪ 他人次第って言われちゃうかも

 精神	独立独歩！志高く上を向くっ！ 理想論だって？俺が決めたことゴチャゴチャ言うねいっ
 肉体 (五感)	形にする。見える化する。リアルっ大事！ ちゃんとうたしに利益はあるんでしょうね？
 思考	学ぶ、伝える、楽しいな♪ 一人に肩入れムー！何でも軽やか重い責任は二・ガ・テ♪
 感情	ハートで繋がりがびたっとシンクロ♡ 愛してるからこそクヨクヨ。重たいなんて言わないで♡

「成長ストーリーを読んでも、12サインの性格づけはこれだけで十分な気がするけど。

火・地・風・水とか、活動宮・不動宮とか、この分類ってそんな大事？」

「もちろんだとも。君はまだ12サインを基準に人を観察したことが無いからピンと来ないのさ。

例えば、ふたご座なら『同時並行で複数、仕事をこなす力』、てんびん座は『^{てきとう}適当力』、いて座は『運動能力』、みずがめ座は『^{むしむよく}無私無欲』。

例を挙げればきりが無い」

「ここに書かれてることばかりじゃないんだね。

覚えきれかな…」

「『覚えよう』と思ったら、そりゃあ大変さ。けれどあらゆる^{ぎった}雑多な特徴もよく観察すればこの4分類の組み合わせにすぎない」

「え…今言ったのもぜんぶそうなの？」

「ああ、もちろん。考えてごらん」

「…ふたご座は柔軟宮。人の要望に応える力。風のサ

インでもあるから、その対応力を思考とか言葉とかの範囲で発揮する。

『成長ストーリー』の視点も含めると…。

身近なことに関心が向くから、次から次へと情報に手が届く。そっか。結果、処理が速くなっていくつか同時に学んだり、こなしたりするのが得意なんだ」

「その調子だ」

「てんびん座の『適当力』これはちょっと難しいぞ」

「ヒントは『成長ストーリー』さ」

言われて、考えを巡らせる。

「…初めてこのストーリーを聞いたとき思ったのは、どのサインも一つ前のサインに反発してるってこと。なんかさ。反抗期に似てるよね。

ずっとべったりだったのに、ある時期急にお母さんの欠点に目が向いて全否定したくなる、みたいな」

「そうだね。成長の^{かてい}過程では『^{ふるす}今までの古巣を否定して飛び出す』という^{こうい}行為がつきものだ。

それが次のサインに移る度、毎回起こっているのさ」

「そう考えるとてんびん座の『適当力』って、おとめ座への反発な気がする。

もうそこまで自分を抑えて周囲に合わせたり、準備に頑張ったりしなくていいじゃん、てさ」

「いい視点だ。ある意味ではてんびん座は既におとめ座を通過し、どの程度準備すれば上手くこなせるのかを感覚的に知っている、と言うこともできる」

「なんとなくいい感じにできちゃう。器用なんだね」

「そういうこと」

そう考えるとサインの色々な特徴は、確かに四つの分類とその組み合わせから、読み解けられるようだった。

いて座の「運動能力」は…。

柔軟宮はその場で起きたことに臨機応変に対応する力。しかも、いて座は高い視点で全体を見渡すことができる。これって競技やチームプレイに欠かせない力だ。いて座の運動能力って、たぶんこういうところなんだろう。

みずがめ座の「無私無欲」は…。

男タイプの「外が大事」が極まって「内に取り込む」ことを徹底的にやめちゃったって感じかな。

不動宮って「自分の価値観で、トコトンやっちゃいたい」って意識が強い。繰り返しが得意なだけあって、根性あるんだよ。

それが極まって「やぎ座が作った形あるものを捨てちゃえ！」ってなったのが、みずがめ座の「無私無欲」だ。

ぼくは納得し、大きく頷いた。

「サインの質は、ワンパターンじゃない。

例えば、お金儲けが上手なみずがめ座だっている。彼らの『革新的アイデア』や『人類レベルの視点』を活かしてね。

また無口なふたご座もいる。彼らは自宅でひっそりネットや読書で情報を集めているのかもしれない。

だから自分や人の個性を見て、短絡的に『当たってる』『当たっていない』と決めつけないことさ。でないと大切な才能の種を見逃してしまう」

「才能の種かあ…」

ノートに書かれた、自分の五つの天体とサインに目を落とす。

月 『心と体』：うお座

— 君が悲しいとぼくも悲しい…

あれ…そもそもどっちの感情だけ…

水星 『知性』：おひつじ座

— ぴんっときてパツ！突発的！

金星 『トキメキ』：ふたご座

— 「ねえ、どちてどちて？」好奇心いっぱい！

太陽 『自己表現』：おうし座

— ゆっくり感じながら作るんだ

火星 『パワー』：かに座

— 「よしよし、いいこね」お母さん気質♥

ずっと腑に落ちなかったうお座の月が、ぼくは近頃少しずつ分かるようになっていた。

木野さんや三沢先生と話している時、いつのまにか相手の気持ちが分かったし、その感情があたかも自分のもののように錯覚する。そして時に、彼らはぼくの言葉や振る舞いに癒されて、リラックスする。

水星のおひつじ座も、最近じゃ意識的に使っている。
とにかくピンときたことを理屈抜きで信頼してみる。
今までだったら（間違ってたらずかしいし）とか
（根拠なんてないし）とか、色んな理由をくっつけて
打ち消していたけれど…。

今思えばうお座の月が、自分にダメ出しすることに
慣れきって、水星を認めてやれてなかったんだな。

その習慣を0にするのは難しいけど、意識さえす
れば水星の直感をちゃんと尊重してやれる。

ふたご座の金星。

「星の使い方」に出会ってから、ぼくはこいつが急激に
活発になった。とにかく学ぶことが楽しくて軽いノリ
で続けていける。ぼくにとって「星の使い方」は中々に
エキサイティングな遊びだ。

そのお陰^{かげ}か女の子に自然に話しかけたり、少しオ
シャレまで始めたり…。そして以前なら妙にイラつい
たモテ男子高木が、あんまり気にならなくなった。

自分で天体を使いさえすれば、それを自在に使って
いる相手にイラだたなくなるんだなあ。

誰かへの意地悪な感情って、実は自分の魅力に気づ
くヒントなんだな。

そして、おうし座の太陽。

ぼくは確かにスローペースで、それは色んな人から
言われてること。でもさ。相手と自分を一緒にたにし
ちゃう、うお座の月もスローだと思うんだよな。

だからこの特徴が、うお座の月かおうし座の太陽か、
判別が難しい。

ただね。じっくり自分を見つめていったとき、一つ

思い出したことがある。

ずいぶん以前にぼく、何かにすごく打ち込んだ経験
があるような気がするんだ。

自転車の練習だろうか。それともオセロ？

いや、違うんだ。でも確かにぼくは何かにすごく
夢中になった。

それは「感じる」ってことに関係があって、まあ、
おうし座らしいっちゃ、らしいことなんだな。

だけどハッキリと思い出せないんだ。いったい何
だったろう…。

そして、かに座の火星。

もうぼくは認めるよ。自分に成長を感じた時。誰か
が成長したと思えた時。気持ちが上を向いてやる気にな
る。

いわゆる身内びいきってのもそう。縁があって親し
くなった相手には、いつのまにか肩入れしちゃう。

三沢先生のこと以前から好きだったけど、自分の大
切な思い出を話してくれたことで親近感がすごく湧
いた。何とか力になりたいと思って、だから余計に先
生の諦めモードに腹が立ったんだ。

でもさ、今までだったら相手に感じた腹立たしさを、
「嫌い」とか「だからもうどっちでもいい」とか、そ
んな感情にすり替えていた。

だって好きな相手に拒否^{きよひ}されたら寂しいじゃん。

後で傷つくくらいなら「自分は人に興味が無い」っ
て思い込んでた方が楽だろ？

ちっとも気づいてなかったけど、ぼく、本当は人が
好きなんだなあ。

1

2

3

4

5

6

7

27. 夢を知る手掛かり、アセンダントと MC

「…でもさ。

この五つの天体だけを見ていると、自分がパイロットになるなんて、ちっともイメージつかないな」

ぼくはノートに目を落としたまま、そう言った。

「サインから向いている仕事をイメージするのは楽しいだろうが…。あまり先入観せんいっかんを持たないことさ。

それぞれのパワーをどこで発揮するかはその人次第」

「そっかあ…」

「まあ君がパイロットになるってのは、ウソだけだね」

「はあ?!」

思わず頓狂とんきやうな声をあげる。

「残念ながら、ぼくは未来予知の才能には恵まれなかった。故郷こきやうの木星にはその道のスペシャリストもいるけどね」

「なんだよーっ!!」

「で、どうだい? 振り出しに戻った気分は」

言われてハアッと脱力だつりょくし、それでもジワジワと湧いてくる未来への期待感を抑えきれない。

そうか…。ぼく、ちっとも自分の夢を教えて欲しいなんて思ってなかったんだ。おうし座の太陽らしく、自己実現の道は自分の体感から知りたかったんだな…。

「ねえ、じゃあさ。占星術で『夢』のヒントが分かるってのも、ウソ?」

「いや、それは本当だ。この世で何をしたいくて生まれてきたか。そのヒントを読み取れる箇所かしょが、確かに存在している」

「あくまでヒントだね? 職業名指しとか無いだろうね?」

小さいくまは手を横に振り「ないない」と、とぼけた態度だ。

「OK! じゃあ教えて。ぼくそれなら知りたいよ!」

「いいだろう。それは『アセンダント』と『MC』と言って、ハウスに関係がある」

「ハウス…。たしか個性を発揮しやすい『場所』のことだね」

「その通り。ここで一つ復習だ。

12 サインの始まり。おひつじ座のスタートは、どこだったか覚えているかい?」

「えっと。たしか『春分点』だよ」

「その通り。春分点を起点にし、おひつじ座から順に30度ずつ区分したのが12サイン。これに対し、ハウスは…」

6 ハウス

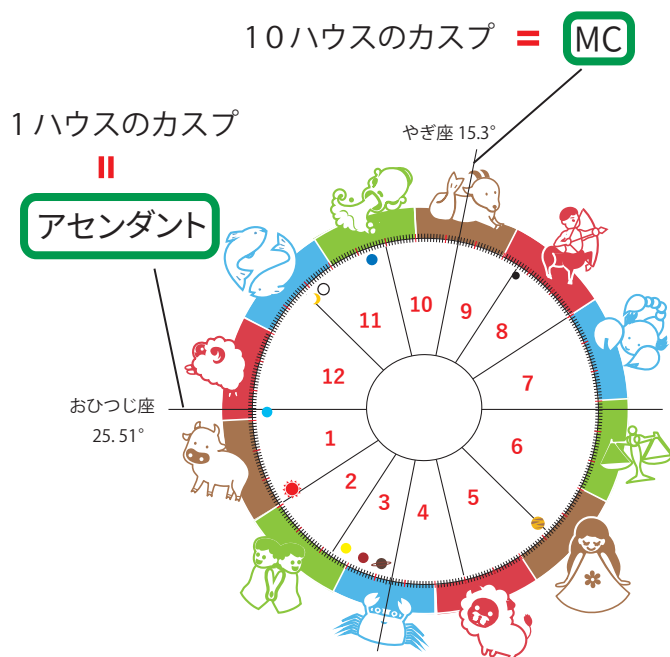
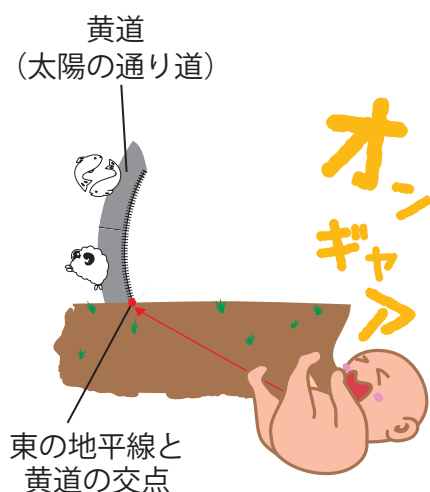
アセンダントとMC

ハウス。その成り立ちと二つの^{かなめ}要。

ハウスは、生まれた瞬間の東の地平線と黄道、この二つが交わる点を起点に1ハウスから始まります。 ネータルチャートを見てみましょう。**1~12** がハウスです。

それぞれのハウスの始まりを **カスポ** と言い、1ハウスのカスポをアセンダント、10ハウスのカスポをMCと言います。※

しょう太の
生まれた日時と場所
2004年5月13日
03:26
埼玉県 秩父市



この二つはとても重要で、

アセンダント = 第一印象・最初の衝動^{しょうどう}

MC = 社会的な立場・肩書き

と言った意味を持ちます。

※ ハウスは計算方法がいくつかあり、本書ではもっともポピュラーなブラシーダス法を用いています。ブラシーダス法の場合、ハウスの幅は30度ずつの等分ではなくバラバラといった特徴があります。

「そっか。サインの始まりは空に、ハウスの始りは大地にあるんだね」

「ふむ。面白い視点だ」

モックまは頷いて、言葉を続けた。

「アセンダントは『生まれる前の見えない世界からグッとこの世界に飛び出し着地する、最初の地上点』。

人は生まれる瞬間ものすごいパワーで母親の子宮から飛び出してくる。

何せ昔は出産と言えば、母子ともに生死にかかわる大仕事だったんだ」

「うん。聞いたことある」

「『最初の命のエネルギー』。

そのことから、アセンダントは『人が行動や決断をする前の最初の衝動^{しょうどう}やひらめきを司る』、と言われて

いる」

「なるほどー。

『初めてこの世に現れた』ってことで、初めの印象、いわゆる『第一印象』も決まるわけだ」

「さらにもう一つ。もっと大きな最初の衝動。

『そもそもこの世に生まれてきた根っこの理由』も示している」

「そっか！それが夢のヒントなんだ！」

「ああ。アセンダントがこの世で成し得たい『個人的な欲求』なら、MCは『社会と折り合いを重ねて出来上がっていく、最終到達地点』。

月から順に天体を使い成長を重ねたならば、50代半ばには土星に到達するだろう。

この時には『自分の夢』と『社会への貢献』が合致しているはずだ。

その到達地点がMCだ」

「そうかあ」

「アセンダントとMCを正しく読むにはハウスをしっかり理解することだ」

「ついに『個性を発揮しやすい場所』が学べるんだね！」

「ああ。だがハウスはそもそも12サインを土台にしている。

だから君はもうほとんど、12のハウスの特色を理解していると言っていい」

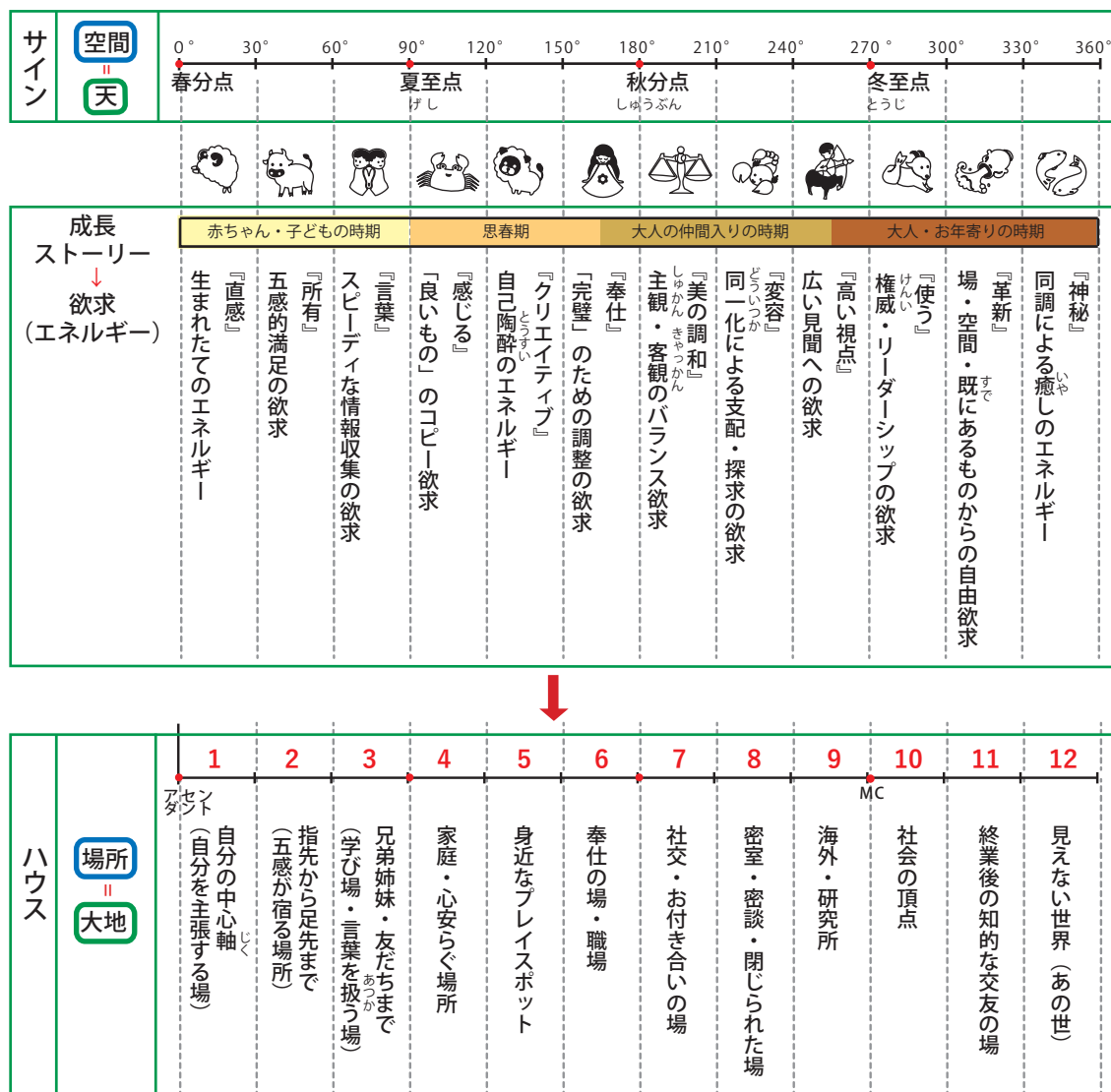
そう言ってモックまは、ページをめくった。

28. 個性を活かす場所「ハウス」を読む

6 ハウス

ハウスの
原点はサイン

成長ストーリーを「場所」に置きかえる。



「さて。先ほど君は、サインの始まりは『空』に、ハウスは『大地』にあると、言ってくれたね。

ここには一つ規則性がある。空・12サイン・人の質。こいつは手で触ることができない。けれど大地・12ハウス・場所は、手で触ることができる」

「まあ、そうだね」

「占星術はイメージの連想ゲームだ。つまりここから分かることは、12のサインが示す『人の質』を、手で触れるもの、目に見えるものに、置き換えたものが『ハウス』ってことなんだ」

6 ハウス

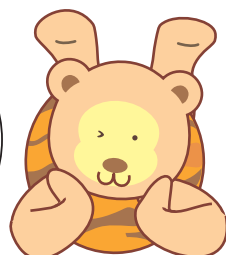
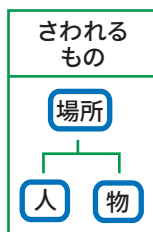
ハウス早見表

ハウスは、場所・人・物など、形あるもの。

ハウスには、その場所で生み出されるもの、関係のあるもの **物**

その場所に関係する人、職業 **人** など、形あるものが含まれます。

天	大地
サイン	ハウス
質	場所
さわれないもの	さわれるもの



		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
ハウス	場所	サイン (自分を主張・表現する場 取り巻く雰囲気)	才能・五感が活かされる場 (フリーランスの活動の場など)	知的好奇心が満たされる場 (学び場・執筆の場など)	心安らぐ場所 (家庭・ホームグラウンドなど)	刺激的で創造的な場 (プレイスポットなど)	管理・調整・奉仕の場 (地域・職場など)	社交・お付き合い・お披露目の場 (パートナーなどとの出会いの場)	(密談・密室・寝所など) 閉じられ、受け継ぐ場	広い見聞の欲求を満たす場 (海外・研究所・出版所など)	MC (最終的な職場など) 社会の頂点	終業後の知的な交友の場 (サークル・勉強会など)	見えない世界 (精神世界・自然・内面)
	人	自分		兄弟姉妹	両親	子ども	恋人	鏡となる人	妻・夫 支援者	お金などの 援助者			内なる自分
	物		お金				健康の要に なる体の部分		譲り受ける物 遺産	出版物			見えないもの

「これだけじゃ、ちょっとピンとこないけど…」

言いながら、ある箇所が目にとまった。

「ねえ。7ハウスの『社交・お付き合いの場』だけだよ」

「なんだい？」

「人の項目に在る『鏡となる人』ってなに？自分のそっ

くりさんにでも出会うの？」

半分おちゃらけて、そう尋ねる。

「ふむ。悪くない視点だね」

とモックま。

「え、どういうこと？」

「7ハウスはてんびん座を背景に持つからね。

ここに天体が多くある人は『出会う人々によって自分が何者かを知る』そんな場面^{そうぐう}に遭遇しやすいんだ。

以前言っただろ？ 使っていない天体は他人に使われるって」

「うん、覚えてる」

「こいつは全ての人に起こる事だが、7ハウスに天体が多い人は特にそれが強調される」

「え…じゃあ例えば、火星が7ハウスにある人は、しょっちゅう短気なヒト^{から}に絡まれたりとか？」

「まあ火星が使えてなきゃ、あり得るだろうね」

「えー！ 7ハウス、超悲惨^{ひさん}じゃん！」

「いや、くり返しになるが、それは内面の映し鏡としてのワンシーンにすぎない。

例えば12ハウスに天体が多くある人は、心の奥を一人静かに見つめることで自分の未熟さを知る。

1ハウスに天体が多ければ、衝動的^{しょうどう}に動いた結果、巻き起こした事件によって自分のいたらなさを知るかもしれない。

これが7ハウスの場合、他人が鏡となって現れて、教えてくれると言うわけさ」

「なんか人とのトラブルが多そうで、やだなー」

「しかし良い面もあってね。自分自身が成長すればその内面が環境に表れるから。

サポートしてくれたり、取り立ててくれる人物に多く遭遇することになる。

それがここに書かれている『支援者』だ」

「いいじゃん、7ハウス」

「…相変わらず短絡^{たんらく}的だね」

「ねえ、じゃあさ。8ハウスの『遺産^{いさん}』ってなに？」

ここに天体がある人は、やたら葬儀^{そうぎ}に遭遇するとか？」

「いや…。8ハウスはさそり座の影響下にあるからね。

さそり座がどんなサインだったか、覚えているかい？」

「うん。ここまで育った自分の個性を一度殺して相手と完璧に一体化する」

「そう、まさに『自分を一度殺す』。

この場所は個人の個性^{いったん}を一旦殺して、もっと大きな存在、例えばご先祖様とか〇〇家一族とか、そういうものに従う、という意味があるんだ」

「わーなんかサスペンス劇場みたい」

「そうすることで、得られるものは何だい？」

「…遺産？」

「そういうこと。

ここに多く天体を持つ人は、才能を活かしてお金を稼^{かせ}ぐと言うよりは誰かの庇護^{ひご}や援助のもと暮らす、そんな環境に身を置くことも多い」

「えーいいな、8ハウス」

「ただし目には見えない拘束^{こうそく}があったり、自分を主張できない暗黙^{あんもく}のルールが敷^しかれていたり。

そんな前提がある」

「考えものだな、8ハウス」

「まあ、つまりだ。どのハウスに天体があっても、能動的^{のう}にその環境で天体を使ったなら、必ず実りが在るということさ。

講釈^{こうしゃく}はこれくらいにして、早速、君のチャートでハウスを読んでみようじゃないか。文型を使ってね」

「文型？」

1

2

3

4

5

6

7

ハウスとサイン。読み方の方程式を知ろう。

ハウスとサインの組み合わせから「様々なシーンでのふるまい方」が分かります。
文型を使って読んでみましょう。

ハウス	始まりのサイン	終わりのサイン
1. わたしの [] は、	一見 [] ですが、	中身は [] です。
2. わたしは [] では、	始めは [] ますが、	だんだん [] になっていきます。

1の文型は、その場所では一見どう映り、実際はどうなのか。

1・4・12 ハウスなどで用いやすいでしょう。

2の文型はその場所での最初の反応や行動、徐々にどう変化していくかを表します。
どのハウスでも用いることができるでしょう。

それでは、しょう太のチャートを使い、文型を使ってハウスを読んでみましょう。

ハウス
1 自分を主張・表現する場（取り巻く雰囲気）
2 才能・五感が活かされる場（フリーランスの活躍の場など）
3 知的好奇心が満たされる場（学びの場・執筆 ^{しっぴつ} の場など）
4 心安らぐ場所（家庭・ホームグラウンドなど）
5 刺激的 ^{しげき} で創造的 ^{そうぞう} な場（プレイスポットなど）
6 管理・調整・奉仕の場（地域・職場など）
7 社交・お付き合い・お披露目 ^{ひろめ} の場（パートナーなどとの出会いの場）
8 閉ざされ、受け継ぐ ^つ 場（密談・密室・寝所など）
9 広い見聞の欲求を満たす場（海外・研究所・出版所など）
10 社会の頂点（最終的な職場など）
11 終業後の知的な交友の場（サークル・勉強会など）
12 見えない世界（精神世界・自然・内面など）

1. わたしの□□は、一見□□ですが、中身は□□です。

これに4ハウス『家庭』を当てはめて考えると…。

わたしの 家庭 は、一見 かに座 のようですが、中身は しし座 です。

かに座はアットホームな優しい感じ。一方しし座は、独立独歩！オレはオレの道を行く！だから…。

わたしの 家庭 は、一見 アットホーム ですが、中身は それぞれ自由で独立独歩 です。

「当たってる～！！！」

とぼく。

「ふむ。占星術は、当たる当たらないの領域を超えたシロモノだが、まあ『当たってる』だろうね」

「やーうちってホント、授業参観とか体育祭とか、やたらしっかり見にくるし弁当とかもちゃんと作り、一見かに座なんだよね。

でもふた開けてみると姉ちゃんも母さんも、自分の好きなことを好きなようにやってるし。父さんも結局そうだし。しし座だわ…」

ぼくは面白くなって、2番目の文型を使ってみることにした。

2. わたしは、□□では、初めは□□ですが、だんだん□□になっていきます。

こいつに7ハウス『社交の場』を入れて…。

わたしは、社交の場 では、初めは てんびん座 のようなことをしますが、だんだん さそり座 のようになっていきます。

てんびん座は距離感を保ち、軽やかに対応するサイン。一方、さそり座は相手とどこまでも向き合って、知り尽くしたいサイン。てことは…。

わたしは、社交の場 では、最初は 適度な距離感を保ち ますが、だんだん 相手とじっくり密に向き合う よう になっていきます。

「こ…これは。まさしく今のぼくじゃん！

木野さんにはべったり馴れ馴れしくしないよう頑張ってるけど、正直ぼくもっと彼女のこと知りたくて仕方ない。

踏み込まないでいるの、きついもん」

「じゃあ次は、アセンダントのある1ハウスと、MCのある10ハウスを読んでごらん」

アセンダント = 第一印象・最初の衝動

MC = 肩書き・社会的な立場

1. わたしの□□は、一見□□のようですが、中身は□□です。

わたしの 印象 は一見 おひつじ座 ですが、中身は おうし座 です。

おひつじ座はピュアで勢いのあるサイン。一方おうし座はじっくり自分のペースを守るサイン。だから…。

1

2

3

4

5

6

7

わたしの印象は一見 ピュアで俊敏そう ですが、中身は おっとりとしてマイペース です。

「自分でピュアとか恥ずかしいけど、中身がおっとりマイペースなのは認めるわ…」

「おひつじ座は赤ちゃんのエネルギー。

お母さんの子宮から産道を通して、おぎゃあと飛び出してくる命のパワー。だから目力が強かったり、頭が大きかったりすることが多い。

君の瞳は黒目がちで、中々印象的だよ」

言われて納得するべく。実は頭が大きいのも、ちょっぴり気になってたんだよね…。

続いて MC が在る、10 ハウスに目をやる。

2. わたしは、□□では、初めは□□ですが、だんだん□□ようになっていきます。

わたしは、社会の頂点 では、初めは やぎ座のようにしますが、だんだん みずがめ座のよう になっていきます。

やぎ座は、格式を重んじるサイン。自分や人の能力を最大限に使うリーダー格。

これが、ぼくの MC・社会の肩書を示すサイン。

そして後半のみずがめ座は、新しい発想で道を切り開く自由人。人種や年齢、性別を超え、ネットワークを広げる力を持つ。

(うーん。先の未来すぎて、ぜんぜんピンとこない…)

モックまが言った。

「そんな時は、想像の範囲で構わない、複数、パター

ンを書き出してごらん」

わたしは、社会の頂点 では、初めは 伝統や格式を重んじた職業につき、これを極め ますが、だんだん 自由な発想で仕事の幅を広げるよう になっていきます。

わたしは、社会の頂点では、初めは ビジネスに力を入れ、大きな結果を出そうと頑張り ますが、だんだん 儲けよりも、平等性や自由を大切にしよう になっていきます。

「いいじゃないか。こうしてイメージを膨らませ書き出しておくよね。

ある時『なるほど！こういうことね！』と腑に落ちる瞬間が、必ずくる。自分の天体を使い続けていればね」

「そっかあ…」

ぼくはじっと、自分が書きだした文章を見つめた。

例：しょう太

1. わたしの[]は、一見[]ですが、中身は[]です。

アセン
ダント



1ハウス

わたしの **印象** は、一見 **俊敏そう** ですが、中身は **おっとりとしてマイペース** です。



4ハウス

わたしの **家庭** は、一見 **アットホーム** ですが、中身は **それぞれ自由に独立独歩** です。

2. わたしは[]では、始めは[]ですが、だんだん[]
ようになっていきます。



7ハウス

わたしは **社交の場** では、始めは **適度な距離を保ち** ますが、だんだん **相手とじっくり密に向き合う** ようになっていきます。

MC

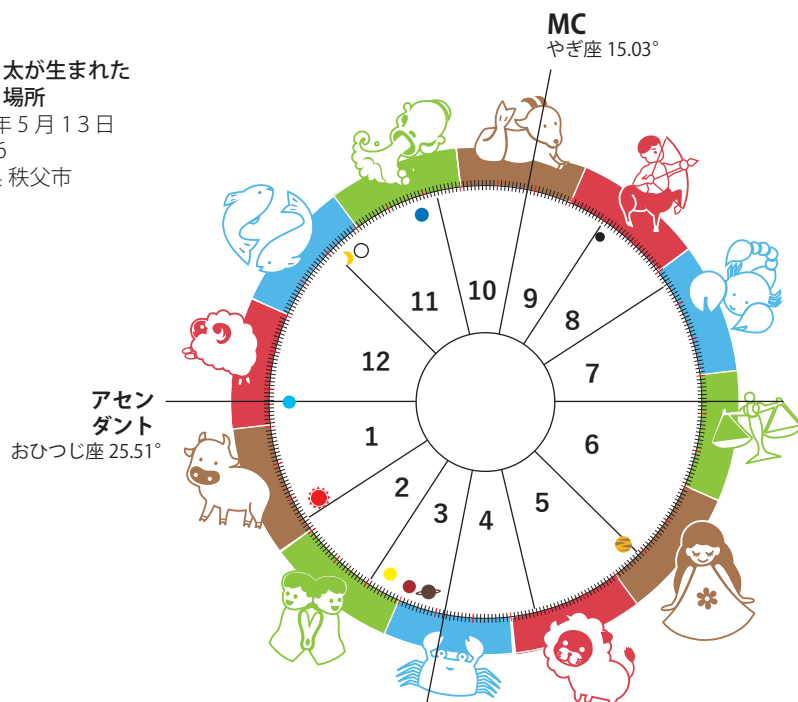


10ハウス

わたしは **社会の頂点** では、始めは **大きな結果を出そうと頑張り** ますが、だんだん **儲けよりも、平等性を大切にする** ようになっていきます。



しょう太が生まれた
日時と場所
2004年5月13日
03:26
埼玉県 秩父市



29. サインをサポートする天体たち

「なあ、モックま…」

ぼくはモジモジしながら、そう切り出した。

「なんだい？」

「人生の色々な場面で『自分がどう振る舞いやすいのか』それは分かった。でさ。

もしその振る舞いが元でトラブルになったりしたら、どうしたらいんだろう？」

「と、言うと？」

「や…だからさ…」

いつも見たく、内側の声を察して欲しくて上目遣いでモックまを見る。知ってか知らずか、きょんとしているヤツの様子がじれったい。

仕方なくぼくは言葉を続けた。

「木野さんはずいぶん風が強いじゃないか。

一方ぼくは水が強い。風は文字通りドライ。水の湿っぽさが苦手だろ？」

「まあそうだね。

風と火は男タイプ。土と水は女タイプ。

男と女が互いを理解できずに苦しむように、この両者は葛藤を生みやすい」

「7ハウスの『社交・お付き合いの場』で、ぼくはほんとに軽めな態度で距離感保ってる。

でも正直もっと彼女のこと知りたいし、もっと本音や弱みを共有したい。

これは水の質もあるけれど、きっと7ハウスの後半サイン、さそり座も働いてるじゃん」

「ふむ。だろうね」

「もしさ。今後ついうっかり彼女の境界線を超えて、

嫌な思いをさせちゃったり。さらにさらに、嫌われそうになっちゃったり。

そんな事態になったなら、なにか対処方法ってあるのかな」

「まあ…12サインは自分と違う質の持ち主と向き合って、最後はあらゆる相手を受け入れることを目標にしてるから。

嫌われたり、はたまた相手にイラ立ったり。それも全て良い経験だけだね」

「そんな宇宙レベルの意見、いいからさあ。どうにか上手くやる方法教えてよ」

「ふむ。いいだろう。

ハウスの始まりと終わりのサインで『その場所での振る舞い方』がわかる。それはもう分かったね」

「うん」

「そして、それぞれの場所で何か問題が起こったり。あるいはさらにその場所で学びを重ね、もっと魅力をアップさせようとする時、ぼくらは『ルーラー』を使うんだ」

「ルーラー？」

3 天体

ルーラー
個人天体

サインにはそれぞれ守護してくれる天体がある。



12 サインには、それぞれ守ってくれる天体がありこれを **ルーラー** と言います。

天体が、自分の守護するサインにある場合、よりその力が活発に働くという特徴があります。

サイン	天体（ルーラー）
 1 おひつじ座	 火星…パワー ぜウマが合う トコ猪突猛進な ちとつもうしん
 2 おうし座	 金星…トキメキ あたし達 上質な ものが 好きなの



サイン	天体（ルーラー）
 3 ふたご座	 水星…知性 このスピード、心地いい！
 4 かに座	 月…心と体 気持ちがいい 分かっちゃう
 5 しし座	 太陽…自己実現 輝き度はナンバワン！
 6 おとめ座	 水星…知性 分析、実務はおてのもの
 7 てんびん座	 金星…トキメキ おかげ様でモテモテ♥

「なるほどね。残りの五つの天体は、後半の五つのサインを受け持ってるの？」とぼく。

「その通りだ。よし。ここで木おばさんから順番にサクッと紹介しようじゃないか」

3 天体

社会天体と
トランスサタニアン

社会天体は大人の視点。トランスサタニアンは宇宙視点。

社会天体

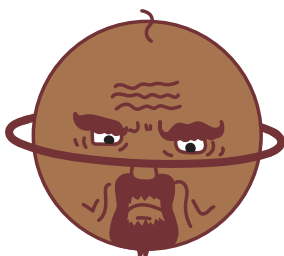


どっしり 受け入れ
㊦ **木** おばさん ㊩

木星：ゆる～い社会性

増大・発展・受容・善なるもの

火星どんの後にくるあたしはね。あのモーレツな勢いはすっかり治まっちゃってね。「みんな仲良くやろうじゃないか」
そんな境地さ。おかげさんで物や人や
チャンス何かがたんと巡ってくるわけ
さね。色いろ広げすぎちまって時に手一
杯になるくらいさ。はっはっはっ。



キビシク[㊦]
具現化**土**星じい

土星：キビシイ社会性

そぎ落とし・具現化・規律・安定

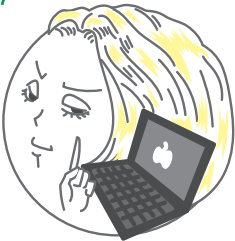
木おばさんが広げたもんを、あしゅ片っ端からぎん味して、いらんもんは切り捨てる。社会で結果を出そうと思ったら、ムダなことに時間を費やしてるヒマはない。まあ、あしの下でしばらくがんばりゃ何がしかの結果が出る。コツコツやり抜くことじゃ。

ここからは社会天体を二つに分けていきましょう。

「社会でのわたし」を作る木星と土星を社会天体。

世代全体に影響を与える天王星・海王星・冥王星をトランスサタニアンと言います。

トランス サタニアン

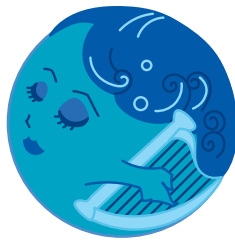


☆自由と革命☆
天王様

天王星：革新

部分改革・個人主義
場所、枠を超える（ネット）

ヘイ、ベイビー。ぼくら三人は宇宙からの伝言を土星じいたち下位の連中に届ける役割さ。ぼくはじいの築きあげたものを、一部壊して新しい風を送り込む。じいは何せ古風だからね。この破壊がどんな意味を持つのかよく分からない。でも、ぼくのかにはあらがえないのさ。



いやしのアーティスト♪
海王様

海王星：インスピレーション

夢見・ワンネス・神秘・芸術

わたしは夢見の星。場所も時も全てを超えて一つになるの。わたしは自然。わたしは宇宙。ああ、無限にひろがるインスピレーション。あたしに溶け込むことであなたの心はいやされる。自分はただ生かされている。そんな真理に到達するの…。



♡怖い怖いのレスキュー♡
冥王様

冥王星：起死回生

0か100・死と再生・洞察・巨大な力

あたちね。あなたのたましいが成長するために時々あなたの心や身体を壊すの。あたちね。あなたのたましいが望んで無い現実には時々ゼーんぶゼロに戻すの。だってたましいの声しか聞こえないんだもん♪てへっ♡

1

2

3

4

5

6

7

「新メンバーいよいよ登場だあ…。

あれ、でもなんか木お婆さんと土星じいは親しみ持てる感じだけど、天王様以降ちょっと異質だね。みんな『様』ついちゃってるし」

「まあ、彼ら三人は別格だからね。そもそも天王星が発見されたのが1781年。占星術の歴史が2000年以上ある中で、それまでは土星までしか読まなかったんだから」

「え、それで事足りたの？」

「当時は『世代に影響を与える』って考え方が無かったんだろう。

例えば木野さんと君は、天王星・海王星・冥王星が、すべて同じサインに在るはずだ」

「うん。そうだね」

「土星も、一つのサインに留まる期間が約2年半だから同じかに座に在るだろう。そんな風に公転周期の遅い天体ほど世代全体に影響を及ぼす」

「うん、勉強したよね。覚えているよ」

「その分、天王星・海王星・冥王星は、個人の日常な^{じゅうようし}ど重要視しないというか、人間の意識を^{ちようえつ}超越しちゃってるというか、そんな存在なんだ」

「うん。見るからにそんな感じだね。

冥王様とか超怖いし。『たましいの成長のために、時々君の心と体を壊しちゃうの』とか、意味わかんないし」

「まあ、冥王星を怖がる人は多いよね」

「この三人、どうかしてるよ。

天王様だって『一部を破壊』とか言って結局壊し屋じゃん。海王様も『わたしは宇宙』『わたしは自然』とかつぶやいてるけど、これってぶっちゃけ人格崩壊^{ほうかい}だろ？」

「…君は時々、ずいぶんと口が悪くなるね」

「えーだってなんか、この三人の影響って要らない気がするんだもん」

「まあ、人は未知なものを恐れるからね。

とは言え君のチャートを見ると天王星との関わりがずいぶん強いんだが…」

モックまは、ぼそりとそんなことを言った。

「え…」

「まあ、いいや。

今はルーラーのレッスンだったね。話を戻そう。

おとめ座まではルーラーがそろった。

こんな風にサインとルーラーは似た者同士だ。これを参考にして、次のさそり座から順に組み合わせを当ててごらん」

「オッケ。んー…さそり座かあ。難しいなあ。パス！」

「…早いね。まあいいだろう。じゃあ次のいて座はどうだい？」

「これは何となく分かる！『夢もでっかく！話もでっかく！』この超楽天的な感じ、木お婆さんでしょ？」

「その通り」

「やぎ座は絶対、土星じいと相性いいはず。やぎ座のルーラーは土星！決定！」

「そして？」

「もうこの後は超簡単。天王星はみずがめ座のルーラーで、海王星はうお座でしょ」

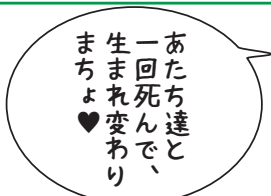
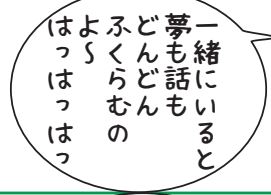
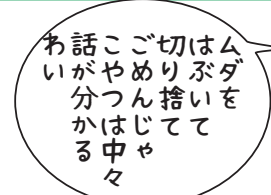
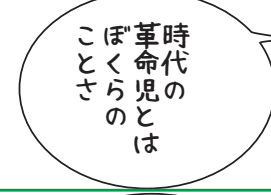
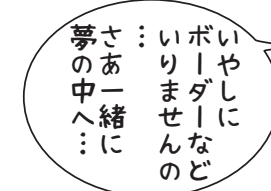
「その通り！これで、残ったさそり座の受け持ちが分かっただろう？」

「うん。冥王星だね」

モックまは頷いて、スクリーンボードを開いて見せた。

3 天 体

ルーラー
社会天体・トランスサタニアン

12 サイン	天 体 (ルーラー)			
 8 さそり座			♡ 楽しいのレスキュー♡ 冥王様	冥王星…起死回生 めいおう きしかいせい
 9 いて座			どっり受け入れ の 木 おばさん ♪	木星…ゆるい社会性 よるゝい しゃかいせい
 10 やぎ座			キビシク ♪ 具現化 土 星 じい	土星…キビシイ社会性 きびし しゃかいせい
 11 水がめ座			♪自由と革命♪ 天王様	天王星…革新 てんのう かくしん
 12 うお座			♪ いやしのアーティスト♪ 海王様	海王星…インスピレーション かいおう いるんぷりえーしょん

1

2

3

4

5

6

7

「冥王星は一見恐ろしい天体に見えるだろうが…。

常にその人のハートに激しいノックをし続ける星なんだ」

「激しい…ノック？」

「ああ。『君のやりたいことは、本当にそれでちゅか？』
『あなたがつかんで離さないその感情。それは本当に、
本心でちゅか？』ってね」

「本心でちゅかって…可愛く聞かれましても」

ぼくは苦笑いしてそう言った。

「例えばね。ここに親から受け継いで会社を経営して
いる社長さんがいるとしよう。

けれど彼のたましいの願いは『旅をしながらピアノ
を弾いて暮らしたい！』だったとする。

土星が強い人ならば『とにかく親の築いたものを継
続しなきゃ』『従業員を養わなきゃ』そんな発想で、
たましいの声を無視し続けるかもしれない。

けれど冥王星はね。

土星が築き上げた現実なんか、ちっとも興味ないか
ら。あっけなく会社を倒産させたり、それでも諦めな
いなら体に故障を起こしたり。

そんな風にして『旅をしながらピアノを弾いて暮ら
したい！』と言う、たましいの願いを叶えようとする
んだ」

「…素朴な疑問なんだけど無一文になったり病気に
なったりしたら、そもそもピアノを弾いて旅をする夢
も叶えられないじゃない」

「そんなことはない。

人間は本気でたましいの喜びから生きようとする
とき、とんでもない底力を発揮するものだ。

それよりもむしろ現実というしがらみの方が彼らを
動けなくする。責任とか、プライドとか、常識とか、

安定とか。

だからそれらを一旦リセットし、0に戻すのが冥王
星の役目なのさ」

「さそり座も、一旦自分を殺し相手と一体化して生ま
れ変わる、そんなエネルギーだもんね…」

「そう。だからさそり座と冥王星は相性がいいのさ。
さて、全てのルーラーが分かったんだ。早速こいつを
使ってみようじゃないか！」